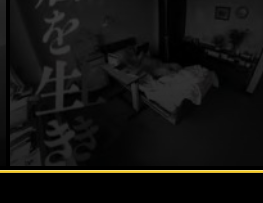
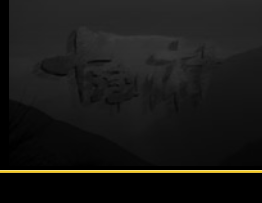
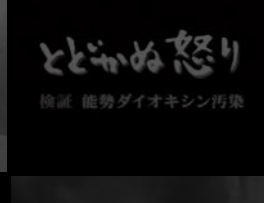
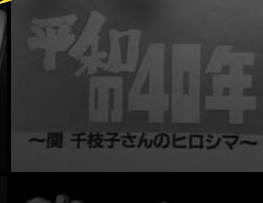
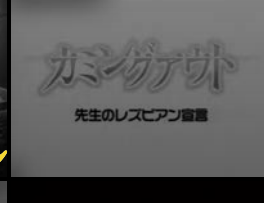
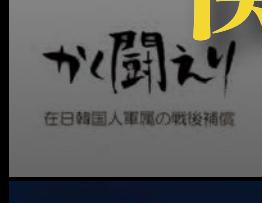
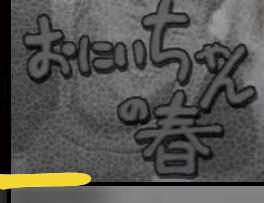
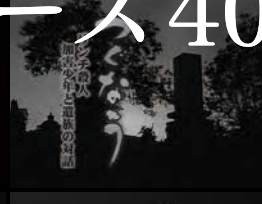
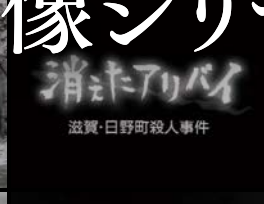
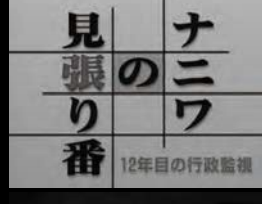
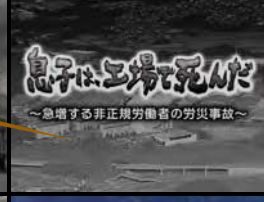
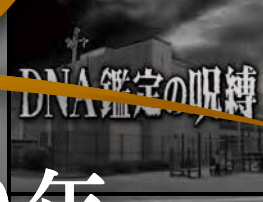
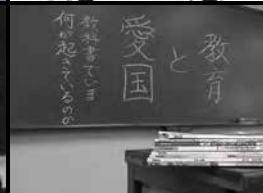


映像'15



40

映像シリーズ40年

関西発ドキュメンタリー
～時代を映し続けて～

MBS

毎日放送報道局 ドキュメンタリー報道部

目次	
巻頭言	1
記念寄稿集	2
放送履歴	9
column 「映像'80」から「映像'20」へ	11
column 映像シリーズに寄せて	44
column 独創的で挑戦的な社会派番組	57
受賞歴	65
編集後記	72



OTO yoshihiro

上智大学新聞学科・教授、同メディア・ジャーナリズム研究所所長。

1961年、札幌生まれ。上智大学大学院修了。日本民間放送連盟研究所所員、コロンビア大学客員研究員などを経て、2007年より現職。

専門はメディア論、情報社会論。著書に『放送メディアの現代的展開』などがある。

NPO法人放送批評懇談会理事長を務める。

「映像」40年によせて

音 好宏

上智大学文学部新聞学科教授

「映像」が誕生して、今年で40年目を迎えた。

1980年春にスタートした「映像」だが、この時期を日本のテレビ史のなかで振り返ってみると、テレビ放送のメディア・パワーが相対的に拡張し、そのプレゼンスがより一層高まった時期ということができよう。新聞広告の売上げをテレビ広告が抜いたのが1975年。テレビ広告が、いわゆる4マス広告のトップに躍り出たわけで、勢い視聴率競争がより一層激しくなっていく。

テレビ広告の伸長は、視聴率競争の激化を招く。1978年にTBSは、JNN系列各局が制作したドキュメンタリーの放送枠「テレビルポルタージュ」の終了という判断を下すこととなる。

他方で、民放の系列化も進み、1975年、MBSは、NETテレビ系列からTBS系列へのネット・チェンジをすることになる。この時期のTBSは、「民放の雄」とも言うべき存在で、また、系列には老舗局が多いこともあって、それぞれのエリアで報道力に自負を持つ局が少なくなかった。「テレビルポルタージュ」の終了は、各局のドキュメンタリーを全国に届ける定時枠を失ったことにほかならなかった。

ちなみにTBSは、その10月に、調査報道（Investigative Reporting）を掲げた大型ニュース番組「JNN報道特集」を開始。JNN各局は、報道特集で、自社で取材したルポルタージュの全国展開を志向することになる。

そんななか、1980年4月にスタートしたのが「映像」である。

スタート当初の作品群を眺めると、「公害」「在日」「障害」「戦争」といった戦後社会の歪みを扱ったものが多いことがわかる。この「映像」スタート時は、高度成長に陰りが見えてきたなかで、戦後社会の矛盾が顕在化、社会問題に対する関心が高まりを見せた時期でもあった。そのような時代の空気が、「映像」に反映したとも言える。

「映像」のもう一つの特徴は、人にフォーカスした作品が多いことである。その後、福祉、雇用、教育、人権、言論などと、テーマは広がりを見せていくが、人にフォーカスをしたドキュメンタリー作りは、時代状況が変わっても、引き継がれてきたと言えるだろう。

「映像」を語る上で付け加えておかななくてはならないのは、扱う内容の地域性である。「映像」には、比較的報道経験の豊かな専任のスタッフが配置されている。そのこともあって取材先が近畿圏に縛られることはない。例えば、名古屋の市営バスの労働問題や、沖縄の新聞社の現場に、長期の取材を行い、作品化されてきた。これは日本のテレビ・ドキュメンタリーにとって、非常に意味のあることだ。東京の制作者が地方に行くことはあっても、東京以外の制作者が自身のエリア以外のテーマを取り上げる機会がほとんどないなかで、「映像」はその役割を果たしてきたことは確かだ。微力かも知れないが、日本のテレビドキュメンタリーにおける視点の多様性を担保に貢献してきたと言える。

失礼ながら、あえて「微力」と申し上げたのは、編成戦略的に「映像」の全国展開が弱いと思えるからである。ドラマやバラエティーと同じように、ドキュメンタリー枠をそのままVODに乗せて、稼げるようにするのは、日本では厳しいだろう。毎年開催されるテレビ番組のアワードで、「映像」で作品化されていたことを始めて知るケースは多い。この40周年を期に、せめてTVerに乗せてもらえないだろうか。

“線引き”の呪縛からの解放

大園 康志

CBCテレビ報道部専任部長



OZONO yasushi

CBCテレビ報道部、1966年鹿児島市生まれ。54歳。アナウンサーとして入社。2008年から報道部勤務。夕方のニュース企画・特集のデスクや、ドキュメンタリー番組のプロデューサーとして若手制作者の育成に取り組む。ディレクターとして「山小屋カレー」（放送文化基金賞番組賞）（第1回日本放送文化大賞準グランプリ）（日本民間放送連盟賞優秀賞）など、プロデューサーとして、「笑ってさよなら～四畳半下請け工場の日々」（モンテカルロTV祭ニュース・ドキュメンタリー部門ゴールデンニンプ賞）（地方の時代映像祭グランプリ）「消えていく今～7秒の記憶と生きる」（地方の時代映像祭選奨）（ニューヨークフェスティバル銀賞）など「土がくる～規制なき負の産物の行方」（文化庁芸術祭優秀賞）（放送文化基金賞奨励賞）などがある。

“放送エリア”という日本地図にはない地域ごとの線引きがある。我々ローカル放送局の局員は、その中での放送を生業とする。地域の皆さんの生命・財産を守るために放送局はある。だから免許事業。その大前提については、とやかく言うものではない。

私は中日ドラゴンズのお膝元の放送局にいて、ペナントレースの行方に特別興味があるわけでもなく、地元が誇る伝統のゴルフトーナメントに関わる仕事をしてはいてもわくわくするわけでもない。ともに盛り上がって仕事をしている同僚には大変失礼ながら・・・。

しかし、ローカルエリアからたまに飛び出して仕事している同僚に対しては、嫉妬や怒りに似た感情が沸いたことがある。

首長たちの海外視察という名の“大名旅行”にくっついて取材する記者たちの仕事がそれだ。

その旅行はニュースなのだろうか？

その海外取材が許される「特別枠」に違和感を感じた。

（じゃあ下世話な気持ちで仕事してみよう！）

そう思ったのは、2000年前後のことだ。私は当時、30代前半のアナウンサー。

筋ジストロフィーの若者4人で結成された名古屋の人形劇団に取材で出会った。

4人は、フランスにある“人形劇の街”＝シャルルビル・メジエールで隔年で行われる国際人形劇フェスティバルに出演するという壮大な計画を持っていることを知った。

普段、電動車いすで移動している彼らが、飛行機に乗って大移動することが、どれだけの負担になるのか？風邪をひけば命を縮めることにもなるというリスクもあり、介助者や協力者が何人必要になるのか？という大問題を乗り越えなければならなかった。

「それでも行く！」と4人は目を輝かせていた。

私は「同行取材する価値はあります！」と、ドキュメンタリー番組の企画書を初めて書いた。

が、取材したい理由は他にもあった。フランスに行ってみたかったから。それが一番。

とても下世話な“企画意図”だった。

デジカメを持ち、フランス公演の旅に一人同行した。

そして、帰国後、私のドキュメンタリー番組1作目は出来上がり、ローカル放送された。

いま見ると、構成の拙さに恥ずかしくなる1時間番組。

でも、線引き関係なく仕事が出来た爽快感だけは今でもはっきり思い出される。

高い志を持った作り手が、エネルギーを注入して生み出すドキュメンタリー番組は感動を呼ぶ。心からそう思う。

でも、不純な理由で作ってもいいんじゃないの？ そう思う自分もいる。

追いかける対象の生々しさを切りとるのだから、いろんな思いでカメラをまわす作り手がいてもおかしくない。

いろんな人たち、いろんな番組があったほうが世の中おもしろい。多様であれ！と思う。でも、「そんな面倒くさいドキュメンタリーの仕事しても出世しないし」と言う局員もいる。笑。

そんな人はほっといて偉くなってもらえばいい。多様であれ！だ。

過去、私たちの放送エリアで、よそのエリアの作り手が線引きを越えてやってきてドキュメンタリー番組を完成させた。地元の私たちが取材相手に入り込めないほどのエネルギーと取材力によって、番組は多くの人の心を揺さぶった。

当時、私の周りにはシマを荒らされた気分になった同僚がいたはずだ。でも、作らなかった。作れなかったではないか。

追いたいもの、追うべきものを追う。まずは、とことんそこを突き詰めるべき。放送の受け手にとっては、昔から放送局の線引きの論理なんて何も関係ないのだから。その呪縛から解き放たれた作り手たちがもっともっと暴れるべき。もう地上波だけで食べていく時代ではないのだから。

あの日、私たちのシマで取材していたディレクターは、大阪のとある放送局の人だった。当時の私には、とても刺激的な出来事だった。



KURODA isamu

1951年大阪市生まれ。
京都大学助手、神戸女子大学、大阪経済大学を経て1999年より現職。
放送文化論専攻。
1997年より2011年まで毎日放送番組審議会委員。
80年代後半よりMBS番組のコメントーターとして出演。

視聴者に挑戦する テレビドキュメンタリーを

黒田 勇

関西大学社会学部教授

最近ではテレビを見ていて、あらゆる番組ジャンルが「ドキュメンタリー」のように思えてくる。例えば「半沢直樹」すら。今、この企画が立てられ、脚本が書かれ、スポンサーへの営業があり、あのセットが設営され、あの俳優たちが選ばれ、彼らが期待に応じて過剰な演技をする。昨年でもなく一年後でもなく、今コロナ禍のこの時に放送されている。そこには、「今ここに」が記録されている。

ネットでもなく、映画館でもなく、テレビ画面から流れてくる限り、それを見る人とテレビとの関係において「今ここに」が映し出されることになる。テレビはドラマですら人々の「いま」を映し出す。今さらながら「テレビ」なのである。ドキュメンタリーのリアルさを保証してきたのはテレビだと改めて思う。テレビのリアルさを保証してきたのがドキュメンタリーかどうかは定かではないが。

テレビの視聴者が老獪な「読み手」に変化しつつある現在、上述の「半沢直樹」における私の例に限らず、その読み手たちは「送り手」とは異なる「読み」をテレビ番組に対してするようになっている。そして、それを一部支えているのがネット情報であり、SNSである。

さて、そうした制作者と視聴者とが共有する「いま」がドキュメンタリーを支えていると思っていた私を混乱させ、そして制作者の意図から私を独立させたのは近年のネットではなく、20数年前のMBS「映像'90」の「よみがえる調べ」であった。現在は大学の同僚

となった里見繁氏の作品だが、番組審議会に諮られたとき多くの委員はその展開に驚いた。すでに他界した天才バイオリニストについての回想と思い見ていると、ラストに現在のど本人が登場するというもので、作り手が別の時間において、視聴者の驚きを意図したような手法に、私はしてやられたという思いが沸いた。ドラマのような手法もありなのかと戸惑いつつ、なにか腹立たしくもあった。

このとき以来、私は番組コンクールの審査でも、制作者の伝えたいメッセージ以上にその手法、構造、記号群にこだわったコメントや評価をするようになった。現場の方々からは「何を言っているんだ。作る人間の身になってみる。」という反応が聞こえてくることもあった。しかし、私はあくまで、制作者の意図とは異なる「読解側」のスタンスでの発言をするようになった。そのきっかけとなった里見作品は、それほどまでに私の「ナイーブな心」を傷つけたのだろう。「映像」シリーズをめぐる象徴的な思い出である。

ただ、そうした挑戦的な作品を見慣れてしまうと、各種コンクールの審査員として各作品を評価する際に奇妙なことが起きてしまう。すでに時効だろうが、他の審査員がMBS「映像」作品を高く評価するなか、「MBSさんの作品の割には、凡庸だ」と言ってしまったことがある。つまりは、他局の作品との比較ではなく、「映像」シリーズの作品群を準拠枠とするようになっていたのである。

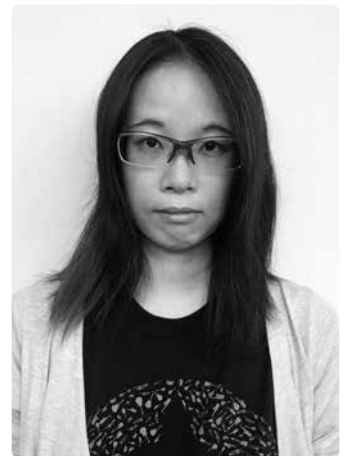
話をはじめに戻したい。敢えて「半沢直樹」の例を挙げたのは、ドキュメンタリーもドラマも、その頭に「テレビ」をつけていることに意味があると思うからだ。ドキュメンタリー作品も、ネット配信や劇場上映など様々な試みがなされている。メディアの多様化は否定しようがない。しかし、ドキュメンタリーが力を持つのはやはりテレビが醸し出す「いま」感、時空の共有感があるからだ。そして、「映像」シリーズが力をもつのはテレビ編成枠の中にレギュラー枠があるからだと思う。その力をもってSNSに慣れ親しんだ老獪な読み手たちに挑戦しつつ、「社会のいま」と対峙して行ってほしい。

テレビの「いま」を大事にしなくなった時、ドキュメンタリーは終わるのだと思う。そして、ドキュメンタリーのないテレビなんて、とも相変わらず思っている。

地方ドキュメンタリーに望むこと

津村記久子

作家



TSUMURA kikuko

1978年、大阪市生まれ。2005年「マンイーター」(のちに『君は永遠にそいつらより若い』に改題)で太宰治賞を受賞してデビュー。2008年「ミュージック・プレス・ユー!!」で野間文芸新人賞、2009年「ポトスライムの舟」で芥川賞、2011年「ワーカーズダイジェスト」で織田作之助賞、2013年「給水塔

2020年において、人間が自分自身について発信するコストは、ほとんど通信費のみという状況です。人類の歴史はこのまま、「自分について発信すること」に関しては、ひたすら開放の一途をたどるのではないかとわたしには思われます。もちろん、個人情報の取り扱いが厳しくなっていくでしょうし、自己演出は洗練されて、ついていけない人は淘汰されていくでしょう。それでも「自分が自分について語ることを人間が容易に手放すことはないように思われます。

だからもう、ソーシャルメディアにつながれば他人についてなんて知り放題で、現代ほど「他者」に近く在ることができる時代はないのだ、と言えるかという、そうでもないような印象をわたしは持ちます。もしかしたらこれから変わってゆくのかもかもしれませんが、個人的には、「私」と「私」がものすごい密度でひしめいているだけで、その人たちが「他者」同士になってお互いのことを知り合うということが頻繁に起こっているかという、そうでもない、というのが今のソーシャルメディアの主な様態なのではないでしょうか。

と亀」で川端康成文学賞、2016年「この世にたやすい仕事はない」で芸術選奨新人賞、2017年「浮遊霊ブラジル」で紫式部文学賞、2019年「ディス・イズ・ザ・デイ」でサッカー本大賞、2020年「給水塔と亀」でPEN/ロバート・J・ダウ新人作家短編小説賞を受賞。「とにかくうちに帰ります」「エヴリシング・ロウズ」などの著書がある。

本当は大きな事件や何事かが起こって、不意打ちで話しかけられなければ、普通の人の普通の姿を知ることには不可能なのではないかとすら思います。「自分」が発信する「自分」は、「自分自身」が編集したその人自身だからです。そこに他者の視線を意識する意図はあっても、他者の視点はありません。

「私から見た私」が溢れかえる中であって、ドキュメンタリーの良さというか、得難い部分というのは、「他者から見た他者」という視点なのではないかと私は思います。ドキュメンタリーを視聴すると、だいたいどんな内容でも、本当に月並みですが「こんな境遇の人がいたのか」「こんなことを考えている人がいたのか」と必ず思います。それは、他者を知ると言うには及ばないまでも、他者の姿を垣間見る経験です。もちろん、私たちは社会生活を営んでいる以上、他人が見せたい他人以外の姿をたくさん見るわけですが、それは周囲の、自分が話したり様子を常に見ることができる人に限られます。ドキュメンタリーという表現形態には、その制約を飛び越えて、それまで知ることがなかった他者について、他者の視点から見るができるという、普通に生きていたらとても難しいことを可能にする力があります。

今もって私たちは、遠い誰かが「自分はこういう者だ」とする主張には近付けても、すれ違う誰かの、電車で隣り合ったり前に座っている誰かの嘆きや心配や喜びについてほとんど知ることはできていません。目に見える知らない誰かの物語を知ること、その人について知ることである以上に、近しい社会について知ることであり、自分自身がどのように生き、社会の中で振る舞っていくべきかについて、自ら舗装する道そのものではなく、その外にある地形の側から道筋をつけることでもあります。

ドキュメンタリーの中の、更に地方ドキュメンタリーという器は、未だ知ることのない近くの他者について語ってくれる貴重な分野なのではないでしょうか。ドキュメンタリーは他人のありのままの姿を見せてくれると言いたいわけではありません。意味は「こんな人がいるのだ」という提案と提起にこそあります。「こんな人がいるのか」と誰かが思い、考えるきっかけになることそのものに価値があるのです。地方という枠の中の、身体的には近しいのに精神的には未だ隔てられている人々が、何を考えて生きているのか、地方ドキュメンタリーがそれを私たちに少しずつ届けてくれることを期待しています。



NIWA yoshiyuki

東京大学大学院情報学環准教授。専門はメディア研究、ジャーナリズム研究。著書に『日本のテレビ・ドキュメンタリー』（東京大学出版会、2020）、編著に『NNNDキュメント・クロニクル』（東京大学出版会、2020）など。1974年、三重県生まれ。

汝の立つところを掘れよかし

丹羽 美之

東京大学大学院情報学環准教授

関西発のドキュメンタリー番組「映像'80」がスタートしたのは1980年。この年、系列のキー局TBSでドキュメンタリー番組の放送枠がなくなった。視聴率競争が激化し、民放テレビでドキュメンタリー枠が次々と消えていくなか、関西ローカルだけでもドキュメンタリー番組の火を灯し続けようと、MBSの制作者たちが起ち上がった。逆風からの船出だった。

一方で追い風もあった。同じ年、全国各地のドキュメンタリー制作者が集う「地方の時代」映像祭がスタート。地域から声を上げ、この国を問い直す。経済大国となった日本の矛盾や歪みをローカルの視点から見つめ直す。政治、経済、文化のあらゆる面で東京一極集中が進むなか、地域ジャーナリズムへの期待はかつてなく高まっていた。「映像'80」はそんな時代の荒波のなかで生まれた。

その初期に「新アリアンのうた〜'80・冬・猪飼野〜」（1981年）、「神戸新開地 幸福 荘界限」（1983年）など数々の名作を生み出した温井甚佑は、1990年5月号の「調査情報」で、番組スタート時のことを次のように回想している。

初期のプロデューサー石田晃三はもともと映画畑出身、本当にフィルムが、映像が、そしてドキュメンタリーが好きであった。愛していた。われわれにフィルムの、そして人生の一コマ、一コマの大切さを身をもって示してくれた。当時、石田「巨匠」は「映像80」について以下のように記している。

「汝の立つところを掘れよかし」、地域に密着した映像づくりの場をまずつくろう、スタッフをつねに活性化しておく舞台が必要だという試行錯誤で始まった。

それ以来、「映像」は40年間にわたって、関西を拠点に自らの足元を見つめ続けてきた。差別問題と教育のあり方を問うた「伝える言葉〜大阪府立柴島高校〜」（1992年）、戦争に翻弄された村の歴史を証言から掘り起こした「十津川村の戦争」（1994年）、脳性麻痺の夫婦が多くの人々に支えられながら子育てする姿を追った「ふつうのままで〜ある障害者夫婦の日常〜」（1999年）……。これまでに放送した数は、なんと480本以上。その1本1本に、その1コマ1コマに、地域に暮らす人々の喜びや哀しみ、怒りや叫び、希望や絶望が刻み込まれている。

取材先は必ずしも関西とは限らない。自分の地域の問題は必ず全国に、全国の問題はまた地域につながっている。トヨタ工場の「労災隠し」の実態に迫った「夫はなぜ、死んだのか〜過労死認定の厚い壁〜」（2007年）、教科書採用をめぐる教育現場にかかる圧力を追った「教育と愛国〜教科書でいま何が起きているのか〜」（2017年）、震災復興のちぐはぐな現実を浮かび上がらせた『復興五輪』の陰で東北は…」（2020年）……。『映像』の40年史は、そのまま現代日本のドキュメントでもある。

汝の立つところを掘れよかし—こつこつと自らの足元を掘り続けた40年。そこには紛れもなくジャーナリズムの希望が宿っている。これからもその原点を忘れず、関西からこの国のあり方を鋭く問い続けてほしい。

好敵手『Nドキュ』からのメッセージ

水島 宏明

上智大学文学部新聞学科教授
(元日本テレビ『NNNドキュメント』ディレクター)



MIZUSHIMA hiroaki

1957年北海道生まれ。

1982年札幌テレビ入社、NNN ロンドン特派員、ベルリン支局長を経て、日本テレビへ転籍。

『NNNドキュメント』を担当した後、2012年に退職して法政大学教授を経て現職。

毎日放送の「映像」シリーズが40周年を迎えられたことに心から敬意と祝意を表したい。筆者は長いこと日本テレビ系列の「NNNドキュメント」にかかわってきた。日々のニュースで見落とされがちな事実注目し、「地域」や「当事者」の視点で“時代を映す鏡”であろうと意識して取材。貧困などの現場で当事者の姿を誰よりも伝えてきたつもりだった。現場で取材しているとよく遭遇したのがNHKのカメラ。民放ではキー局は来ないのになぜか「MBS」というロゴのカメラによく出くわした。「関西局がなぜ?」。そんな現場が何度あったことか。

東京・日比谷公園に年越し派遣村が出現して日本中の貧困問題が可視化された瞬間。宮城・名取市閑上など大津波で多数の犠牲者が出た悲しみから人々が立ち上がろうとしたと

き。原発事故で住めなくなった福島・飯館村…。なぜその現場に来るのか。その嗅覚はキー局以上で番組名を尋ねると「映像」シリーズだった。

「映像」シリーズと同様に年号の下2桁が番組名になる「Nドキュ」は1970年開始で民放最古参のドキュメンタリー番組だ。週1回の全国放送で系列29局が持ち回りで制作。レギュラー枠は30分、拡大枠が55分枠だが年間10本しかない。一方の「映像」シリーズは月1度の放送を毎日放送が1社で制作。毎回1時間枠。いつしか好敵手として意識したが、時に「Nドキュ」も手を出せないジャンルを取材していて悔しい思いもした。

大学の研究者になって改めて見つめ直せば、はるかに先に行くジャーナリズム本流の仕事をしてきたことがよく分かる。トヨタという巨大企業での過労死を実名で取り上げ、福島での重大事故が起きる前から原発の危険性に警鐘を鳴らした「熊取6人衆」に焦点を当てた。障害者、貧困、特別養子縁組、冤罪、戦争の爪痕、在日コリアン…。市バス運転手の自殺から組織のありように切り込み、沖縄へのヘイト言説でも差別の言葉を無自覚にたれ流す同業者であるテレビ局にも批判の刃を向けた。さらに自民党政権の教育改革がこの国の教科書をどう歪めたのか検証し、ジャーナリズムの本領を發揮した。作品群を振り返ればそれだけでテレビ報道の歴史と重なる。受賞歴が物語るように取材の深さに加えて撮影や編集などの質も高く、その年を代表するドキュメンタリーを送り出している。

弱点らしい弱点は「ローカル放送」という点だが、ネット配信で視聴できる時代に入り、筆者の古巣「Nドキュ」は残念ながら全国放送という優位性を失いつつある。

メディアの大変革期が到来し、民放ビジネスも変容を迫られている。そうした中で毎日放送が築いてきたこの公共財をどのように守るのか。どう生かしていくのか。放送文化の今後を決める大事な決断になる。日本社会の未来のためにもこれからも社会に警鐘を鳴らし続けてほしい。



金曜日23:30～（55分番組）



第1回放送作品

1980年4月から「映像'80」として放送を始めた「映像シリーズ」は、これまで戦争、公害、人権、労働、教育、原発など実にさまざまなテーマに果敢に挑戦し続けてきました。番組のメインとなる取材場所が、関西以外ということも数多くありました。これまで積み重ねてきた480回以上の放送で「映像シリーズ」は、何を伝えてきたのか。「放送履歴」としてまとめました。

1980年「映像'80」

- # 1 4月11日
6歳未満 ～沖縄・戦災被害者の証言～
幼い頃、戦争で傷つきいまでも、その後遺症に悩む沖縄の女性が、戦後35年目にして初めて語る戦争体験の実録。
- # 2 5月2日
山のたより ～能勢早春記～
厳しい生存競争を強いられる都会生活を棄て、大阪の過疎地「能勢」で農場を作り、土と親しんでいる若者たちの記録。
- # 3 6月6日
突入！激動選挙 ～金権腐敗を斬れ～
「何度選挙をやっても政治は変わらない」。いまや、有権者の常識だが、「ダブル選挙」は、政治の浄化剤になるのか。
- # 4 7月11日
刺客を追って
竜馬暗殺の犯人探しをライフワークとしている研究家が、時間の中に埋もれた竜馬暗殺事件の謎を掘り起こしていく。
- # 5 8月1日
16歳の断章 ～倅せの闇のなかで～
暴走する受験戦争からはじき出された高校中退者の現況を記録。暴走族、少年院など。
- # 6 9月5日
中山千夏 ～161万票の期待～
子役から政治の世界に飛び出した中山千夏さんの政治哲学、生活信条を浮き彫りにする。
- # 7 11月7日
だましぶね ～癌と闘う母と子の記録～
全身ガンに侵され、左腕切断など9回の大手術に耐えながら教育に情熱を燃やしてきた女性教師の記録。
- # 8 12月5日
自炊男爵瓢々記 ～広沢瓢右衛門伝～
83歳の浪曲師・広沢瓢右衛門さんの「映像伝記」。舞台スター、瓢右衛門としての姿と自宅で自炊暮らしをするひとりの高齢者としての姿との動と静を捉える。



1981年 民放連盟賞 優秀賞

1981年

9 1月2日

ドキュメンタリー野球人生 ～西本幸雄・野村克也～

番組では、藤本義一氏の司会で、勝負にかける男たちの個性と集団との関係、選手の育て方、スーパースター不在となったプロ野球の未来などについて語り合う。

10 2月6日

新アリのうた ～'80年・冬・猪飼野～

在日韓国・朝鮮人65万人のうち、約5万人が住む大阪市生野区猪飼野。“偏見”の中で生きることを強いられてきた彼らにとって、ここだけが故郷であり、息をつくことのできる唯一の場所だ。在日韓国・朝鮮人の目を通して、ほとんど知られていない「猪飼野」の日常を伝える。

11 3月13日

水俣ひとり芝居 ～はるかなる公害元年～

ひとり芝居で水俣の死者たちの鎮魂を祈りながら、したたかな闘いを訴える元新劇俳優の「勸進興行」を記録。

12 4月10日

校長室だより ～廃校の御園小学校から～

児童の大幅減で廃校する尼崎市立御園小学校。「心で耕す教育」を理念とする校長と廃校に反対を続けた育友会の動きを追う。

13 5月8日

じいちゃんの長い冬 ～82歳・釜ヶ崎の孤老～

核家族、高齢化が進む中で、置き去りにされる人たちがいる。大阪市西成区のあいりん地区に住む家具職人だった高齢の男性の半生の記録。

14 6月5日

マイロード ～国際障害者年を考える～

大阪府吹田市にある障がい者のための通所施設「さつき授産所」。重度の障がい者と若い職員の献身的な交流、生きる意味を考える。

15 7月10日

水意識 ～トリハロメタン・ショック～

上水道の消毒に使う塩素「トリハロメタン」は、発がん性物質の誘因だと住民は、危機を募らせた。水に対する意識を辿る。

16 8月7日

帰化

毎年、日本に帰化する1万人のうち90%が、在日韓国・朝鮮人である。帰化した人たちへの偏見の実態を描く。

17 9月11日

小さな生命 ～奇形ザル・コータの一年～

手足が極端に短いサル、コータに注ぐ中橋さんの深い愛情を描きながら、その原因究明の必要性を強く訴える。淡路島モンキーセンターで手足のないコータが生まれてから一年の飼育記録。



第1回 地方の時代映像祭 優秀賞

18 10月2日

ヒデ君と4人の仲間

言葉の障がい悩む就学前の子どもたちが、言葉を発するために全力で取り組む大阪府堺市の私塾。その半年の記録。

(以降、土曜日 23:40 ~)

19 11月7日

ポランの広場 ~土に生きる先生と少年たち~

京都の山里に農業共同生活の高校「ポランの広場」が建設中。落ちこぼれや非行少年との交流を通して教育問題の一断面を浮き彫りにする。

column 「映像'80」から「映像'20」へ

「映像'80」が誕生した1980年代は大型の生ワイド情報番組やニュースショーが登場した年である。歌番組の司会をしていた元アナウンサー久米宏をキャスターに起用した「ニュースステーション」（1985年10月、テレビ朝日系列）は月～金の夜10時台に編成され、堅苦しいニュース番組のイメージを一変させた。

そして、“報道のJNN”からドキュメンタリー番組が姿を消したのも80年代。

吉永春子（TBS）木村栄文（RKB）らが活躍したJNN系列の「テレビルポルタージュ」は1978年3月に視聴率を問われて終了した。このあとタイトルを「土曜どきゅめんと」と変えて、硬派からソフト路線へとイメージチェンジするも、回復しないまま1980年7月に撤退を余儀なくされた。

つまり、TBSを中心としたJNN系列が20年以上にわたって積み上げてきた骨太でオーソドックスなドキュメンタリー番組発信の場の存続が危ぶまれる事態になったのだ。

そこで、系列局である毎日放送はレギュラーでのドキュメンタリー番組制作の機会を失ってはならないと、自力で継続して制作する放送枠をひねり出すことにした。

企画段階から携わった者として悩んだのは、30分番組か、60分番組かの選択であった。

この点に関して記録性と発掘性を軸に、制作者の顔が見える形で、番組を組み立てていくということを基本姿勢とした「映像'80」にしてみれば、テーマが大きく、かつ密度の濃い作品を目指すために、30分ではなくて60分番組を選択したのは当然かつ自然の流れであろう。こうして、近畿中心のローカル放送ではあるものの、民間放送としては異例の60分ドキュメンタリー番組が始まった（毎月第1金曜日、23時30分）のである。

民間放送にあっては、地味で暗いイメージのドキュメンタリー番組を避ける傾向にある中、深夜に、何十年と放送し続けることができたのは何故か。

これはやはり、強力な発信力をもつ「映像シリーズ」の作品群が、内外の映像コンクールで一定の評価を得たこと、ひいては放送企業としてのイメージを高めたことによって、社内のみにとどまらず、社会的にも理解が深まっていったためではないかと思われる。

今後とも、ドキュメンタリーの系譜を絶やすことなく、意義ある広汎なメッセージを発信し続けていくことを期待したい。



● 貝谷 昌治（初代プロデューサー）

KAITANI masaharu

1935年生まれ。毎日放送報道局プロデューサー、大阪芸術大学放送学科教授をへて現在、関西民放クラブ「メディアアウッチング」世話人。

主な著作に、『ドキュメンタリー論』（丸善株式会社、2001年）『放送を学ぶ人のために』（共著 世界思想社、2005年）など。

20 12月5日

家族 ～沢田登美子詩集より～

1980年、主婦の沢田登美子さんは、生活詩集「生える」を自費出版し、大きな反響を呼んだ。生活する意味を問い続ける夫婦の日常を映像に記録。

1982年

21 1月2日

孤夢 ～ゆめひとり～

急速に進む高齢化社会。認知症対策など高齢者の実情を年末年始の中に淡々とユーモアを交えて描く。

22 2月6日

再会 ～中国残留孤児の戦後～

15000人を数える中国残留邦人。そのうちの一人の父親一家との再会と「祖国」での違和感などを描く。

23 3月6日

予想屋さん ～人間万事塞翁が馬か～

園田、姫路の地方競馬で順位を予想することを仕事にしている男性。草競馬の人情、風俗を交え、珍商売の人生模様をユーモラスに描く。

24 4月3日

恵子の母子旅芝居

兵庫県尼崎市の下町、寿座を根城に旅興行を続ける市川おもちゃ劇団。経営難から閉館になる寿座の大衆演劇の表情をルポ。

25 5月8日

大阪駅物語 ～1982年4月～

巨大な新しい駅ビルを建設中の大阪駅の素顔・24時。人生の旅の出発、終着の駅にどう人たちの人生模様を多彩に表現する。

26 6月12日

昭和の女たち ～忠魂碑訴訟原告団～

大阪地裁で全面勝訴した箕面市の忠魂碑訴訟の原告団。裁判とは縁のなかった主婦たちの闘いを支えた反戦の原点は…。

27 7月10日

わら一本の革命 ～自然農法・福岡正信～

愛媛県の福岡さんが、不耕、無農薬で行う米麦生産量は、水準を超える。「自然と人間の思想」を通して農業の病理をえぐる。

28 8月14日

ろくさんは死んだか ～戦後民主主義の検証～

戦後の新教育制度、6・3・3制の一期生の年代の平凡な市民グループ「ろくさん」の民主主義の検証。

29 9月11日

鈴の声 ～托鉢の反核運動～

反核の世界的潮流の中で、“原発銀座”の福井県小浜市で被爆者救済・平和を訴え托鉢を続ける僧侶の草の根反核の歩みを描く。



第2回 地方の時代映像祭 優秀賞

- # 30 10月9日
 帰り道は遠かった ～ある少国民・放浪の記～
 竹川さんは終戦時、満州国境で両親と生別、朝鮮人に育てられた。密出入国、無国籍者として放浪した孤独な人の記録。
- # 31 11月13日
 夏の凧
 シンガーソングライター BOROさんの青春。「大阪の女」のヒット、離婚…。ロックと映像の詩的構成。
- # 32 12月11日
 いま村は大ゆれ ～農民作家・山下惣一～
 佐賀県唐津市のへき地で農業をするかたわら日本農民文学賞を受賞した山下さん。山下さんの創作活動や農業と村民たちの生活を通して農業崩壊の実情を探る。

1983年

- # 33 1月8日
 神戸新開地 幸福荘界限
 かつての歓楽街、新開地はさびれて久しい。古い木造アパートに暮らす高齢の女性たちの陽気な暮らし。アパートにカメラを据え女性たちの年末、新年を描く。
- # 34 2月12日
 汚職に怒りを ～堺市倫理条例をめぐる～
 ロッキード裁判の年、堺市では全国初の「反汚職条例」の制定を巡り注目を浴びる。市民運動の地道な活動を追う。
- # 35 3月19日
 灘高44年卒 ～彼らの内なる東大～
 学園紛争のため昭和44年度東大入試は中止。灘高生たちは他校へ転身した。14年後、傷ついたエリートたちはいま。
- # 36 4月13日
 センバツ青春グラフィティ ～和歌山・星林高校～
 星林高校のナインの素顔に密着。家族や学校の波紋をユーモラスに描きながら、エリート野球にさわやかな一矢を…。
- # 37 5月14日
 5059票の孤独 ～候補者の365日～
 統一地方選挙・大阪府議選挙に立候補した新城さん。落選した新人候補の一年の活動を通して得た地方行政の実態は…。
- # 38 6月11日
 今こそ世直しを ～山本健治氏の場合～
 自転車選挙などの地道な活動で高槻市議2期を経て大阪府議になった“山健”。彼を通して既成政党の今日的状況を考える。
- # 39 7月9日
 ミニ政党てんまつ記 ～初の比例代表選～
 初の比例代表選を特色付けたミニ政党の乱立を追い、政界の大衆化路線を描く。



第3回 地方の時代映像祭 優秀賞

40 8月13日

倫理条例を追う ～議員さんの資産報告から～

全国初の倫理条例が施行された。しかし、資産公開は多くの市民の憤激をかっった。反汚職の困難さを描く。

41 9月10日

異聞満蒙開拓団青少年義勇兵

小沢さんはかつて14歳で義勇兵に志願した。8万人のうち半数が死亡。38年目の終戦月の苦しい回想を追う。

42 10月8日

ポランの広場Ⅱ ～土に生きる先生と少年たち～

私塾には、落ちこぼれなど11人が暮らす。私立高校設立に人生を賭けた先生と少年の心の軌跡を描く。

43 11月12日

神戸新開地 幸福荘界限

さびれて久しい神戸・新開地の一角で、明治・大正・昭和の縮図を描く高齢の女性たちの人生、幸福を探るドキュメンタリー。1983年1月8日に放送したものを再編集した1983年度の芸術祭参加作品。高齢の女性たちの幸福論、人生論を約一年の記録の中に描いてゆく。

44 12月10日

祖国は ～中国帰国者の日月～

神戸市に住む中国帰国者一家で次男が殺害される事件があった。肉親再会の涙の感激の背後に潜むものを追う。



第38回 文化庁芸術祭賞 優秀賞
第10回 放送文化基金賞 奨励賞

1984年

45 1月14日

山に棲むなり ～作家 宇江敏勝～

森林浴がブームだ。熊野の過疎の山里で炭焼きなどをする作家、宇江さん一家とやま人の年末、新年の森林生活を描く。

46 2月11日

倫理条例の全体像 ～堺市の一年～

全国初の倫理条例が施行されて一年。議員の資産報告の杜撰さを指摘する草の根民主主義の年間の記録。

(以降、土曜日 10:45 ～)

47 3月10日

学校は嫌だ ～高校中退10万人は今～

静岡の仏祥庵での再生の日々、大阪の農場、思春期病棟をレポート。人間教育は何か、を問いかける。

48 4月14日

花と仮面と ～京の大念仏狂言～

信仰と芸能と生活が融合し、600年をへる壬生狂言を支える講の40人を追い、伝承に当たる人々の心を描く。



第4回 地方の時代映像祭 優秀賞

49 5月12日

ポランの広場高校・開校 ～つっぱり先生と少年の3年～

京都に全寮制高校が開校した。落ちこぼれの少年たちとの新しい教育実践の前に横たわるのは…。

50 6月9日

女の気持ち ～男女雇用均等法から～

雇用格差に反対する4人の女性の場合を取り上げ、現実の雇用格差の壁に立ち向かう「女性の気持ち」を探る。

51 6月30日

生命のエピローグ ～脳死の時代と心臓移植～

脳死移植を取り巻く医療の最前線をレポートする。日本人が納得できる死の判定、人間の臓器移植の可否を巡って…。

52 8月11日

浮島丸釜山港に向かわず

昭和20年釜山に向かう浮島丸が舞鶴港沖で爆沈した。歴史の間に葬られつつある謎を追う。

53 9月8日

ボクちゃんの戦場

学童疎開を描いた小説を映画化。連日、戦争を疑似体験し、泣き出す子どもたち。「語り伝える戦争」を考える。

54 10月20日

いのちの汚染 ～先天異常とダイオキシン～

日本は、世界でも有数の合成化合物の生産・消費国。猛毒のダイオキシンが、ごみ焼却場から見つかった。生命の汚染を訴える。

55 11月10日

素顔の植村直己 ～すぐ帰ってくるからね～

五大大陸の最高峰をきわめた植村さんは2月、マッキンリーで消息を絶った。43年の生涯と人間像に迫る。

56 12月15日

かい人21面相 ～ある社会的考察～

グリコ森永脅迫犯。警察の威信を蹴落とし、マスコミをもてあそぶ犯行を各界の証言を軸に社会的に考察する。

1985年

57 1月19日

越冬 ～釜ヶ崎85～

大阪市西成区のあいりん地区は、閑空建設景気で賑わう。しかし年末は、日雇い労働者には、孤独の時だ。底辺の年越しを描く。



1984年 民放連盟賞 優秀賞

58 2月16日

一本の指から ～韓国人高校生の指紋押捺～

外国人登録時の指紋押捺は、人権無視だと拒否運動が高まる。韓国人高校生の苦しみの日々を綴ってゆく。

59 3月16日

家族の崩壊 ～その底辺を探る～

ひとり暮らしの高齢者、離婚、心中、非行など家族の崩壊が現代を特徴付ける。貧困の実態をルポし、崩壊の原因に迫る。

60 4月20日

オモニのうた ～天王寺夜間中学1年2組～

200万人の未就学者。天王寺夜間中学389人の生徒の殆どが、在日韓国・朝鮮人のオモニたちだ。先生と生徒の触れ合いを通して人間としての生き様を描く。

61 5月18日

とべサーカス 20歳

サーカス団の見習いとして働く19歳の少女や元銀行員の20歳の女性など、舞台裏の人間模様を描く青春の軌跡。

62 6月15日

国鉄解体 ～消えた操車場～

東洋一を誇った吹田操車場が消えて以降、貨物列車を相手に働いていた国鉄マンの生活は大きく変わった。

63 7月20日

岩田健三郎のへらへらつうしん

兵庫県姫路市に住む版画家、37歳。「人生は旅」という市井の芸術家とそれを取り巻く人々の交情…。

64 8月17日

平和の40年 ～関千枝子さんのヒロシマ～

被爆の体験を綴った関さん。被爆死した39人の級友たちの慰霊祭が行われる広島へ。40年の思いは…。

65 9月21日

おもしろ学校に寄つといで ～ぼくらの臨教審85おおさか～

「お年寄りの教育論議は聞き飽きた」と学校講師や大学生、高校生などが開校した「おもしろ学校」の日々。

66 10月19日

甲子園の異邦人

56年夏、甲子園に出場した7人の韓国・朝鮮籍の少年たち。本名でスコアボードを飾った選手たちのその後を追う。

(以降、土曜日 22:30～)

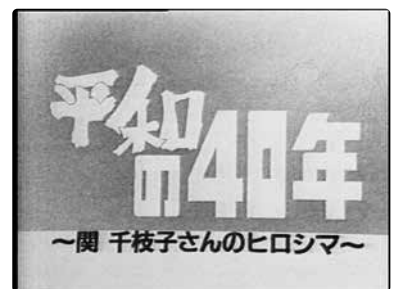
67 11月16日

からすの権四郎 ～沿岸漁民人生模様～

三重県の浜に伝わる網元の名は、権四郎。しかし19年前、陸に上がり今は、鮮魚店を営む。海の男の人生模様は…。



第5回 地方の時代映像祭 優秀賞



第6回 地方の時代映像祭 優秀賞

68 12月21日

わが青春のアマルコルド ～芝居なんぞに明け暮れて～

芝居をやっているだけで天国。定職にもつかず芝居にうつつを抜かず青年男女をとらえ「過剰な演出」の下に描く。

1986年

69 1月18日

行政監視 ～情報公開条例をめぐる～

大阪府の情報公開条例が施行されて1年。公開の可否を巡って訴訟も起きている。市民オンブズマンを取材。

70 2月15日

かなしみいろの女たち ～'86 冬 生野学園～

女性を保護する施設に夫の暴力や消費者金融の取り立てから逃げてきた女性たち。繁栄の世相に潜むかなしみ色。

71 3月15日

文楽修行奮闘記

国立文楽劇場の研修生たちは、60年春採用の10人のうち9人は辞めた。伝統の芸継承に取り組む孤独な青春。

(以降、日曜日 23:40～)

72 4月20日

奇形ザル・10年目の報告

餌づけされた野生ザルに発生している極端に手足が短い原因は？原因究明を阻む、行政側の無関心。学者の活動を追った10年。

73 5月18日

ためらいのヒポクラテス ～心臓移植・86・春～

脳死を巡る議論に結論が出ないまま凍結されている臓器移植手術。患者と手術再開に備える阪大第一外科の動きを伝える。

74 6月15日

タクシードライバー ～苦労人たちの流し唄～

タクシーは、社会の縮図。新人研修を受けた7人のドライバーを中心に多彩な前歴、一日の模様などその生活を紹介。

75 6月29日

凍える鼓動 ～心臓移植とヒポクラテス'86～

5月18日OAで取材した患者が急死した。前作を一部、作り直し、レギュラー枠外で放送。

76 7月6日

宴は終わったが ～ダブル選挙のある断面～

ドブ板選挙と世襲の論理。西川きよしさんが、巻き起こす波乱などを追ってダブル選挙が意味するものを問う。

77 8月17日

タコの困惑 ～明石架橋と漁師たち～

架橋計画が進む明石海峡。タコ漁の漁師や海の変化を見守る科学者の目を通して、架橋が投げかける波紋を描く。

78 9月21日

ぼくたちのチンドンヤ日記

若者4人が集まり出来た「チンドン通信社」。チンドン人生を歩む若者の目を通して「生きるとは」を問いなおす。

79 10月19日

我が名は朴実

在日朝鮮人2世の朴さんは、帰化したが「朴として生きる」ことを決めた。名前を巡る在日韓国・朝鮮人の苦しみと戦い。

80 11月16日

ボクは五代目忠三郎

3歳の正月稽古初めから国立能楽堂の初舞台まで。家と伝統の継承という宿命に結ばれた親子を描く。

(以降、60分番組)

81 12月25日

囚人20034号 ～心に刻むアウシュヴィッツ～

アウシュヴィッツから生還したタデウシ・シマンスキさん(69)は、来日し若者たちと交流した。歴史に学ぶ平和とは？について考える。



第7回 地方の時代映像祭 特別賞
1987年 JCJ賞 奨励賞
第3回 世界テレビ映像祭
外国人審査員賞

1987年

82 1月18日

揺れるマスメディア ～3億円事件からビートたけしまで～

“ビートたけしとその軍団”が、フライデー編集部に殴り込んだ事件を糸口に「報道と人権」について考える。

83 2月15日

神戸・住吉川 ～開発と景観～

神戸市東灘区に高架式の新交通システムの建設が決まった。効率第一主義の都市開発、景観論争を追う。

84 3月15日

わたしも本が読みたい

主婦たちで運営される「わんぱく文庫」。点字本などを揃えた図書館だ。お母さんたちによる図書館活動を伝える。

85 4月12日

わがらの行路 ～新宮車掌区の76人～

114年の歴史に終止符を打つ1987年4月まで大国鉄の終焉を南紀「わがら(紀州弁)」に見る。

- # 86 5月17日
異邦人教師たち ～文部省通達その後～
大阪の公立小学校の3人の朝鮮名の教師を金賛汀が訪ねる。様々な困難にも関わらず、あえて教師を選んだ理由とは？
- # 87 6月21日
青春・笑タイム ～2丁目劇場の若者達～
大阪・心斎橋にオープンした心斎橋2丁目劇場を取り上げて現代の若者たちの意識をさぐる。
- # 88 7月19日
倫理条例が消えた!? ～徳島県鳴門市～
統一地方選の直前、鳴門市の政治倫理条例が廃止された。全国初の条例を持つ堺市など追跡し、倫理と政治を考える。
- # 89 8月16日
亜細亜の巷・鬼の市界限 ～千年シアター建設異聞～
映画「一千年刻みの日時計～牧野物語～」の上映のため、真夏の15日間、映画館作りに情熱を燃やす若者を描く。
- # 90 9月20日
まぼろしセールス ～豊田商事・人間模様～
豊田商事元社員の責任追及に動き始めた破産管財人を軸に元社員などを取材し、意識と実態を探り、現代社会の一側面を描く。
- # 91 10月18日
長い沈黙のあとで ～奄美と原爆乙女たち～
鹿児島県の奄美大島に多数の被爆者が埋もれていたことが最近、明らかになった。長い沈黙の意味を問いかけていく。
- # 92 11月8日
異国にて孤夢
大阪市生野区の猪飼野では、若者が町を出てゆき高齢化が進む。一世の在日韓国・朝鮮人にスポットを当てる。
- # 93 12月20日
長い沈黙のあとで ～奄美の被爆者たち～
長崎原爆病院の医師が、初めて鹿児島県の奄美大島を訪れ、150人を超える被爆者を診察した。再び被爆の問題を考える。

1988年

- # 94 1月17日
破壊の後 ～肝苦りさや・沖縄～
彫刻家、金城実さんが沖縄県読谷村に完成させた平和の像。それが、国体の日の丸論争に巻き込まれ、右翼によって破壊される。
- # 95 2月21日
ただいま一戸 ～丹後小脇冬物語～
丹後半島の小脇で暮らす織田さん夫妻。村を雪崩から救ってくれた地蔵を守っている。2人の一年を追った映像記録。



第8回 地方の時代映像祭 優秀賞

96 3月20日

マッパラム・風に向かって ～日朝混血者と名前～

父親が在日朝鮮人で母親が日本人の2人の女性は、小学校の教師。民族名を名乗ろうとする運動の広がりや2人の女性の悩み。

97 4月17日

冷たい春 ～明延・閉山から一年～

兵庫県の明延小学校が廃校になった。明延鉱山が閉山になったためだ。子どもたちを中心に様々な人間模様を描く。

(以降、日曜日深夜0:10～)

98 5月15日

吉野下北山村物語 ～過疎とツチノコ～

過疎の村で「ツチノコを見た」と言う人が現れフィーバーが起きた。奈良県下北山村を通して戦後日本の近代化の中身を検証。

99 6月19日

現代ミニ出版事情

小規模出版社が増えている。採算を度外視したものも多いが、流通機構の間に苦闘する活字文化を考察。

100 7月17日

人は女術というけれど

アジア各国から日本に出稼ぎに来る女性たち、ジャパゆきさんは、半年の稼ぎで祖国の家族を養う。闇のブローカー女術の信条と女性たちの本音に迫る。

101 8月21日

落語狂風記

落語家、祝々亭船伝は協会を除名されトラックに乗って出前寄席を始めた。反骨の噺家に見る芸への執念。

102 9月18日

ふれあい ～大将と12人のある夏～

大阪のこども心身医療研究所は、子どもたちの心を開かせようと山奥にキャンプを開いた。ひと夏の体験は、何を教えたか。

103 10月16日

ドリーと憲治 ～徳島・東祖谷山村から～

徳島の山村に来たフィリピン人の6人の花嫁。批判や中傷の声の中、一組の夫婦の一年の記録。

104 11月20日

僕の10月 ～ある身体障害者の1か月～

森永ひ素ミルク中毒で全身まひした34歳の男性が過ごした10月の日々。彼の日常が、私たちの日常に潜む異常を映す。

105 12月18日

ともだち ～宗谷岬発武庫川行～

北海道宗谷岬の海岸で流木を拾っていたお年寄りから兵庫県武庫川の女子中学生に至る友だちの絆をトレースする。



第4回 文化庁芸術作品賞

1989年

106 1月22日

地球学校 ～出会いをもとめて～

登校拒否児童を集めて学ばせる兵庫県高砂市の「地球学校」。偏差値と管理で今や工場と化した教育への疑問。

107 2月19日

F-1 17歳の挑戦

F-1を目指す親子のドライバー人生。17歳の少年を巡って巨額の金が動く。少年がF-1デビューする日は、いつ来る？

108 3月12日

明るさに居て独かな

63歳の前科16犯の男性が、俳句にのめり込んだ。主宰する句誌に集う人々に共通する不幸とは。昭和の通奏低音。

109 4月16日

老いも忘れて ～百歳弁護士が行く～

元神戸市長中井一男さんは、いまでも弁護士だ。政治に打ち込んだ彼は、おしゃれで美食家。意気盛んな生活と意見を追う。

110 5月21日

光と影の世界 ～墨絵画家・金城美智子～

墨絵を始めた金城さんは、難病メラノーマに冒され沖縄に帰郷。明日をも知れぬわが身をいとおしむ思いで風景を描き続ける。

111 6月18日

不明の花 ～塔 和子の世界～

12歳でハンセン病療養施設に入り、歌に目覚め歌集を発表。塔和子さんの歩みとその世界に生きる人々。

112 7月16日

将棋ピカレスク 最後の真剣師

太田学さん74歳。賭将棋を業としてきたが、最近は賭ける旦那もいなくなり将棋の指導料で糊口をしのぐ。

113 8月20日

Wind of 南江 ～あるジャズマンの本名宣言～

ジャズマン金成亀さんが初めて本名でステージに立った。オモニの回想などを通して名に託す思いを描く。

114 9月17日

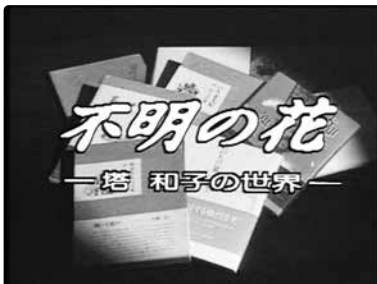
良い医者をつくります ～ある市民病院にて～

日本でただ一人の教育専従医師のカナダ人男性を囲む若手医師たちの日常を通して、日本の医療の在り方を考える。

115 10月22日

神戸・弓削牧場の人々

神戸市北区にある弓削牧場は、牛を放牧している。「住宅地にも牧場は必要」という弓さんの信念と生き方。



第9回 地方の時代映像祭
審査委員会推賞

116 11月26日

故郷の家 ～異国にて～

堺市に完成した在日韓国・朝鮮人の高齢者施設。異郷の地に憩いの家を…。ユンさん夫婦の奮闘記。

117 12月17日

踊る・17歳

4歳からバレエに打ち込む塩谷奈弓さんは、ニューヨーク公演の主演に。プリマへの道に挑む青春の日々を描く。

118 12月31日

祭りは残った ～平成元年山里賛歌～

兵庫県猪名川柏原、過疎が進む山村だ。伝統の秋祭りの存続は危うい。開発か自然保護か…。山里の四季を描く。

1990年「映像'90」

119 3月2日

物語としての建築 ～高松 伸の世界～

「建築は物語であり、誤読の装置である」。高松さんの代表作は、米国映画にも登場した。異形の建築群を映像で解説する。

120 3月18日

ウトロ90冬

京都府宇治市の「ウトロ」。多くの在日韓国・朝鮮人が住む。この町の暮らしを通して、終わっていない「昭和」を考える。

121 4月20日

いかだち昆虫記・早春編

琵琶湖西岸にある伊香立の里。昆虫写真家、今森光彦さんは、ここで撮影を続けてきた。人と虫が奏でるハーモニー。

122 5月20日

おにいちゃんの春

脳炎後遺症で障がい者となった佐野靖文さん(19)の自立への旅立ち。佐野さん一家の苦闘の日々を描く。

123 6月17日

三冊の自分史

自分史がブーム。著者のほとんどは高齢者だ。男女3人が書いた極めてプライベートな一代記に見る庶民の昭和史。

124 7月22日

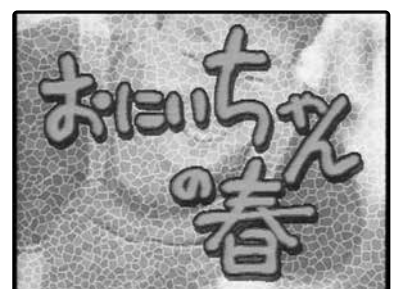
鎮魂45年目の旅

長崎の画家、松添さんの被爆を描いた作品を福留さんはこの夏、初めてみた。描かれた少女が、長女だと分かったからだ。

125 8月19日

もう黙らない ～われら市役所見張り番～

公金詐取事件をきっかけに乱脈体質が明らかになった大阪市で市民が始めた「市役所見張り番」運動。その試行錯誤の日々。



第15回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞

第30回 日本テレビ技術賞 奨励賞

126 9月16日

皇民たちの戦後は…

この夏、来日した8人の韓国人。「日韓併合」から80年。戦後は、本当に終わったのだろうか。

127 10月21日

蓮月尼の解放論

イヤリングに革ジャン姿の尼僧蓮月尼。宗教界の改革を目指して運動をする中、檀家のお年寄りの評価も変わってきた。

128 11月11日

抑留 ～第18富士山丸事件の7年～

解放され帰国しても紅粉船長は、何も語らない。抑留中に家族と交わされた手紙の行間から読み取る。

129 12月16日

クレヨンのネオン街 ～流しの女似顔絵師～

酔客相手の似顔絵師。ユニークな人生哲学を持つ彼女とその周辺の間模様を描く。

1991年

130 1月20日

オシドリ分校の冬

滋賀県多賀市にある分校が廃校の危機に。「故郷教育」でも知られる分校を守ろうと裁判に訴えた父母たち。

(以降、日曜日深夜 0:20 ～)

131 2月17日

OH タカラヅカ ～女たちの市長選～

歌劇と温泉、高級住宅地の兵庫県宝塚市長選に女性市議が立候補した。およそ1か月の女性候補者の奮闘記。

132 3月17日

ニッポン捨て犬考 ～ミス・オリバーの動物王国～

大阪府能勢町で60匹の犬と暮らす英国女性。捨て犬を引き取った彼女の目に映った捨て犬大国、日本の素顔とは…。

133 4月21日

マリの春 ～ある強制退去命令～

フィリピン人、マリさんは離婚後、強制退去命令を受ける。彼女は、大阪地裁に取り消しを求め訴訟を起こした。

134 5月19日

俺の街 ～大阪・生野 ホン・ヨンウン～

大阪・生野区で生まれ育った洪栄雄さんはロック歌手。「偏見があるのは当たり前」。歌には、そんなメッセージで溢れる。

135 6月16日

アイアムヒッピー

山田塊也さんは、日本のヒッピーの草分け的存在。世界を席卷したヒッピー文化とは？あの熱気は、どこに去ったのか？

136 7月21日

敵米兵浮虜 ～昭和17年7月30日キスカ島～

米国キスカ島で捕虜となった米兵の写真が見つかった。写したのは誰か、米兵は誰か。50年を経て見つかった写真を追跡。

137 8月25日

シゲクニin伊丹映画製作事務所

社員の住野真子さんが書いたシナリオが映画に。「下駄とジャズ」という映画製作に集まった若者たちの悪戦苦闘。

138 9月8日

大道芸人テレルとタカコの夏

米国LAに住むテレルさんと貴子さんは「ジャグラー」大道芸人だ。日米で味わう新しい生活、国際結婚のひとつの形。

139 10月13日

投稿の達人たち ～公募マニアの世界～

「公募ガイド」という情報誌が売れている。公募マニアとは、一体、どういう人たちなのだろうか。

140 11月3日

軛の女 ～朝鮮人従軍慰安婦～

日本各地や韓国を訪ね、従軍慰安婦問題に関係した人を探して証言を聞く。また、従軍慰安婦問題について活動する団体取材。慰安所の歴史的背景も紹介する。

141 12月15日

いわれなき虜囚 ～あるシベリア抑留記～

中沢寅次郎さんは、シベリア捕虜の記録集を13年前から発行している。1991年11月、同じ思いの元捕虜たちが集まった。

1992年

142 1月19日

ただ今103歳 ～親子四代旅芝居～

大衆演劇がブーム。姫京之介一座は一番人気。103才の曾祖父からひ孫の12人家族の劇団の年末年始に密着。

143 2月23日

横丁の無声映画史

唯一、無声映画の活弁と合奏を続ける人たち。平均年齢80歳を越えたメンバーの活躍と青春の回想録。

144 3月15日

伝える言葉 ～大阪府立柴島高校～

被差別部落、母子家庭などハンディのある生徒が多い柴島高校。人前で隠したいことを話す試みを始めてから変化が…。



第12回 地方の時代映像祭 大賞
1992年 民放連盟賞 優秀賞
第29回 ギャラクシー賞 奨励賞
第32回 日本テレビ技術賞

145 4月19日

波瀾世 ～星空のメアリ～

在日韓国・朝鮮人二世、三世を中心とした劇団「波瀾世」。その初舞台を通して描く在日韓国・朝鮮人二世、三世の青春。

146 5月17日

レーサーの肖像 ～走り続ける52歳・片山義美～

片山さんは、ル・マンに7回出場。レーサーになったのは「死ぬ確率が最も高いから」。一旦、引退したが復帰した。その過程を追いかける。

147 6月21日

軍艦アパート ～大阪市営住宅60年目の暮らし～

昭和初期に建てられたアパートには、600世帯余りが暮らす。住民の触れ合いと残された昭和史を垣間見る。

148 7月12日

補償交渉 ～信楽鉄道事故から1年～

事故の遺族、鉄道側取材し、苦悩を描くとともに日航機事故のケースを元に補償の問題点を描く。

149 8月23日

イルシオン・春

～日本を目指したペルー労働者たち～

不法在留外国人が駆け込むカトリック教会が大阪・玉造にある。バブル崩壊で厳しい日々を送る外国人と支援する人々。

150 9月20日

線路沿いのリングから

～ボクサー・松村謙一・32歳～

32歳のプロボクサー松村謙一さんに世界選手権挑戦のチャンスが舞い込む。中年ボクサーの日々と人生のあり様を描く。

151 10月18日

奥熊野太鼓 ～町おこしの響き～

和歌山県本宮町に誕生した太鼓グループ。デビューを中心に過疎と住民の高齢化を考える。

152 11月22日

夢に舞う

鎌倉時代の名僧、明恵上人は、見た夢を記録に残した。その夢をテーマにした日本舞踏家、西川千麗さんの創作現場に密着。

153 12月13日

不登校 ～自分さがしの旅に出た若者たち～

高校中退者が通う「師友塾」。なぜ、学校に行けなくなったのか、どうしたらいいのか。現実に立ち向かう教師と生徒の日々。

1993年

154 1月24日

町家の灯り ～老人介護の現場から～

京都の堀川病院は、20年前から高齢者の訪問看護を続ける。国の対策が遅れる中、看護師たちは自転車で町家を駆ける。

155 2月21日

森を学ぶ若者たち ～山の学校1か月～

兵庫県が「県立山の学校」を設立。林業の担い手を育てるためだが…。若者たちの試行錯誤の一か月。

156 3月14日

ぶつかってぶつかって ～盲目の弁護士 竹下義樹～

竹下さんは、中学で失明。日本初の盲目の弁護士だ。ぶつかりながら道を切り開く竹下さんの生き方と障がい者を取りまく社会。

157 4月11日

僕の手あいたから

脳障がいの息子を訓練で自立させた佐野さんが、裁判官を退任。障がい者問題にこれからの人生をかける。

158 5月16日

隣の家 ～千里オールタウン～

千里ニュータウンで74歳の女性が、死後2か月たって自宅で見つかる。妹がベッドで寝かせていた事件の経緯などを描く。

159 6月20日

スピカは夏の一等星・ドキュメント自主再建

会社がある日、自己破産した。運送会社「恩地」の従業員たちが、自主再建させるまでの100日間を描く。

160 8月15日

Bye Bye カンザス ～38年目の戦争花嫁～

進駐軍兵士と結婚し米国に渡った戦争花嫁が、カンザス州に多く暮らす。その一人の半生が、映画になるまでの日々。

161 9月19日

19年目の夏 ～先天性四肢障害児と家族～

「先天性四肢障がい児父母の会」が出来て19年。3家族を取材し、障がいとは、生きるとは何かを考える。

162 10月17日

弔いの風景 ～葬儀への素朴な疑問～

考えてみれば、いまの葬式、どこかおかしい。既成の葬儀に疑問を投げかけ、弔う意味を考える。

163 11月28日

懲りない人生

植田ことさんは、投機的な事が大好き。騙す側の手口も暴きながら明治生まれの懲りない女性の生きざまを追う。



第33回 日本テレビ技術賞 奨励賞

164 12月19日

こころの病棟 ～精神医療はいま～

偏見の強い精神疾患に苦しみながらも明るさを取り戻そうとする患者たちの日常や思いを伝え、精神科医療の問題点を考える。

1994年

165 1月23日

夜間中学

神戸市長田区にある夜間中学校。生徒の半数は、在日韓国・朝鮮人。学校生活や人生を描き、学びと生きる意味を考える。

166 2月20日

王さんと先生 ～中国残留婦人一家のいま～

大阪・平野区の中国語を話す筒井博美教諭と中国残留邦人とその家族との交流。そして、残留邦人と家族の自立を考える。

167 3月13日

十津川村の戦争

奈良県十津川村の村民は戦時中、満州に渡った。戦争がどんな結末をもたらしたか。その後の人生を克明に追う。

168 4月17日

ハルモニの春 ～夜間中学1年生～

神戸の夜間中学に通う在日朝鮮人の金音田さん75歳。戦争に翻弄された人生、学ぶ喜びを伝える。

169 5月22日

おやじの伝説 ～あるスカウトの死～

プロ野球の元スカウトマンだった青木一三さんは、ガン宣告を受ける。息子と青木さんの一か月余りの心の交流を描く。

170 6月19日

逆転 ～テレビ発火訴訟の攻防～

家のテレビが発火した大阪の建設会社社長が、家電メーカーを相手に訴訟を起こした。PL法の意味を考える。

171 7月17日

50人目の任官拒否

任官拒否された神坂直樹さんは、箕面忠魂碑訴訟の補助参加人。そのことが原因ではないかと最高裁に法律論争を挑む。

172 8月21日

夢追い人 ～人生、出直しの夏～

不渡りをつかまされた元社長、人事のゴタゴタで職を辞した病院事務長。日雇いを続ける2人の一発逆転の夢と結末は…。

173 9月18日

いのちたまゆら ～六甲産科医日記～

六甲山麓の産婦人科医、多弥正雄氏。認知症の母を介護し、人の生と死の間に身を置く。



第31回 ギャラクシー賞 選奨
第14回 地方の時代映像祭 優秀賞



第32回 ギャラクシー賞 優秀賞

174 10月16日

喜楽苑の人々

兵庫県尼崎市の高齢者施設「喜楽苑」は、酒もタバコも自由とユニーク。8割が認知症の入居者という長寿社会の断面を描く。

175 11月20日

癌を生きる ～医師布施徳馬の日記から～

2年前、ガンに冒された外科医、布施徳馬氏は、余命をいかに過ごすか。闘病日記を中心に余命が限られた日々を描く。

176 12月18日

マーク屋精二 ～62歳の競輪選手～

62歳の競輪選手、倉田精二さんはかつて、マーク屋と呼ばれた花形レーサー。終戦直後からの選手に引退の日が忍び寄る。



1995年 民放連盟賞 最優秀賞
第32回 ギャラクシー賞 奨励賞
第19回 JNNネットワーク協議会賞
第34回 日本テレビ技術賞

1995年

177 2月19日

ある公務員の死 ～過労死の断面“家族”～

37歳の下水道課職員が、大阪府警の取り調べ中に亡くなった。遺族は、過労死だと申し立てる。男性に何があったのか。

178 3月19日

大阪大空襲 ～50年目の証言～

大阪大空襲の2時間前に生まれ、片足を失った女性など、多くの証言を交え50年前の悲劇の全容に迫る。



第3回 坂田記念ジャーナリズム賞

179 4月16日

水上隣保館の子どもたち

乳児から18歳までの250人が暮らす児童養護施設。カメラは、子どもたちの半年を追った。

180 5月21日

村の反乱 ～もうダムはいらん～

徳島県木頭村が、ダム建設で揺れている。補償金なしでは成り立たない地方行政。そんな中、村議員選挙が行われた。



第15回 地方の時代映像祭 優秀賞
第33回 ギャラクシー賞 奨励賞

181 6月18日

ハルモ二 ～地震と夜間中学～

神戸市長田区の夜間中学。震災で学校は、壊れた。生徒も先生も被災。全員の望みは、学校の再建だった。

182 7月16日

消えた街の夏 ～震災から半年・菅原通3丁目～

甚大な被害を受けた地域。あれから半年。人々はどのように生き、これから生きようとしているのか。

183 8月20日

最後の空襲 ～大阪陸軍造兵廠の8月14日～

終戦の前日、大阪は空襲にあった。米軍は、翌日に終戦になるのを知っていたのに何故、空襲したのか。疑問に迫る。

184 9月17日

仮の町から ～神戸・仮設住宅の夏～

神戸市西区に作られた仮設住宅の町。人々が、仮の町から新しい人生を目指す姿を追う。

185 10月29日

村に敵兵が降ってきた

敗戦間近、B29が和歌山に墜落した。パイロットはどうなったのか、人々はどうか対応したのか。生存者を求めてアメリカへ。

186 11月19日

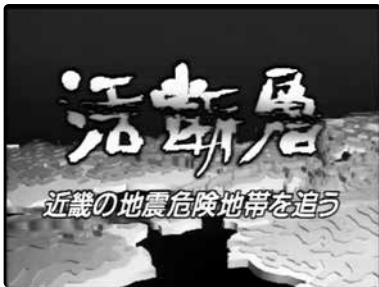
活断層 ～近畿の地震危険地帯を追う～

阪神・淡路大震災で活断層がクローズアップされた。スタジオ生出演の尾池和夫京大教授と分析・紹介する。

187 12月17日

女優として ～朝永桐世の死～

京都の深夜喫茶で63歳の女性が倒れ死亡した。かつて女優だった。貧困に喘いでいたが、周囲には黙っていた。



第20回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞

1996年

188 1月14日

アーケードが消えてから ～菅原商店街20店の選択～

震災から1年、商店街の人々は復興できたのか。そこには、辛い選択もあった。商店街20店のいま、を追跡した。

189 2月18日

十津川村

日本一大きな村では、気風、言語、風習を温存し、今に受け継いできた。日々の暮らしをゆったりした時間の中に描く。

190 3月17日

ガレキの中の84歳

神戸市で自転車店を営む藤憲治さんの家は、震災で全壊した。藤さん夫婦が、家を再建するまでの1年を追う。

191 4月21日

仮の町から ～神戸・仮設住宅は今～

仮設住宅が出来て1年。仮設を出た人は、僅かだ。2年目に入る仮の町を検証する。

192 5月19日

家族 ～水上隣保館の子供たち～

急増する離婚や家族の崩壊で行き場を失った子どもたちの受け皿になっている児童養護施設。1年半にわたる生活記録。

193 6月16日

水俣春寒 ～40年目の岐路～

公害病の原点、水俣病は公式認定から40年を迎えた。関西訴訟の原告たちの割り切れない無念の思いを伝える。



第33回 ギャラクシー賞 奨励賞

194 7月21日

あなたへ ～骨髄移植に賭けた4年間～

平田浩三さんは4年前、慢性骨髄性白血病と診断された。選択したのは、子どもからの骨髄移植。家族で闘った日々。

195 8月18日

よみがえる調べ ～天才バイオリニスト渡辺茂夫～

渡辺茂夫さんは、天才少年と騒がれた。だが米国留学2年目に自殺をし、一命はとりとめる。悲運の天才の40年後を訪ねた。

196 9月15日

大和のはぐれ和尚

大野裕乗氏は、真言宗の僧侶。過疎の村で福祉活動をして欲しいと依頼され、意気揚々と村に乗り込む。現代社会における宗教と人々の関わりを考える。

197 11月17日

さまよえる均等法1期生たち ～関学・西山ゼミの場合～

男女雇用機会均等法1期生が就職して10年。女子大生の今を追跡。多様で自由になったと言われる女性の生き方考える。

198 12月15日

ジャズシンガー

綾戸智恵さんは39歳のジャズシンガー。まだまだ無名だ。病気や子育てに悩みながら歌い続ける女性の生き方を描く。



1997年 民放連盟賞 優秀賞
第21回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞



第1回 女性と放送ネットワーク賞

1997年

199 1月19日

孤り高く ～反骨の写真家・福島菊次郎～

瀬戸内海の島に一人で住む福島さん。右傾化する政治状況を写真で告発してきた。いま、写真資料館の開設に取り組む。

200 2月16日

50万ボルトが来る ～電磁波に揺れる街～

超高压送電線が通る計画が持ち上がった奈良県大淀町。白紙撤回を求める住民と電力会社が、遂に衝突する事態になった。



第34回 ギャラクシー賞 選奨

201 3月2日

須佐野公園から ～震災ボランティアの若者たち～

神戸市の須佐野公園に若者だけの震災ボランティアグループはある。だが、資金に行き詰まり、解散話が持ち上がる。

202 3月16日

消えゆく40番地

戦前、多くの在日韓国・朝鮮人が移り住んだ京都・南区の通称「40番地」。ようやく公営住宅ができ、入居が始まった。「40番地」はこのまま消えてゆくのか…。

203 4月20日

ひびけ村おこしの球音 ～中津村の甲子園～

和歌山・中津村に唯一ある高校が、センバツに出場する。一瞬の夢に酔う村民と過疎の村の悩みを描く。

204 5月18日

夢のまた夢 ～永久発電機に賭ける～

佐賀県の大田敬人さんは、ある発電機を発明した。永久に発電し続ける夢の発電機。いよいよ試作機の製作が始まった。

205 6月15日

本人訴訟 ～医療過誤で息子を失った母親の法廷闘争～

息子を交通事故で亡くした母は、医療ミスを疑い、独学で訴訟に踏み切る。自ら法廷に立ち遂に勝訴を勝ち取るまでの過程を描く。

206 7月27日

お父さんもう一回 ～喜劇役者・木村進の夏～

三代目博多淡海を襲名後、脳内出血で倒れた。リハビリに取り組むある日、半生の出版と舞台復帰の話が持ち上がる。

207 8月24日

14歳 闇にむかうところ ～報告・神戸児童殺害事件～

神戸市で起きた小学生殺害事件。逮捕された14歳の少年の知人たちへのインタビューを中心に少年の深い心の闇に迫る。

208 9月21日

病める食卓 ～摂食障害の女性たち～

摂食障害の女性が増えている。彼女らの生の声を聞き、生き辛さの根底にある家族や社会の問題を考える。

209 10月19日

その日の大塔開拓団

奈良県大塔村から満州に渡った人たちは、敗戦によって窮地に陥った。生存者の証言と手記で描く半世紀前の悲劇。

210 11月16日

異形の君へ ～痣のある青年の遍路～

フリーライターの石井政幸さんの顔右半分には痣がある。同じように顔に痣がある人を訪ね一冊の本にまとめる。

211 12月21日

山里日記 ～ある80歳夫婦の秋～

夫婦は、兵庫県竹野町の山奥で暮らす。唯一の収入源だった1頭の老牛が体調を崩し、とうとう辛い別れの時が来る。



第35回 ギャラクシー賞 選奨



第35回 ギャラクシー賞 奨励賞

1998年

212 1月18日

被災地・三年目の手記

「阪神・淡路大震災を記録し続ける会」には、1998年も134点の手記が寄せられた。手記を寄せた3人の被災者を訪ねた。

213 2月15日

自然農・春夏秋冬

沖津一陽さんは、国立大卒で農水省に入ったが、官僚を辞め故郷の徳島に戻り、自然農に取り組む。沖津さんの1年を追ひ、農業とは何かを考える。

214 3月15日

薬害ヤコブ病 ～谷たか子の闘病日記～

滋賀県甲賀町の谷たか子さんは、ヤコブ病を患う。感染は、脳に移植した硬膜が原因だった。厚生省の責任を問う闘い。

215 4月19日

春を待つ村 ～ダム闘争の果て～

ダム計画に揺れ続けた徳島県木頭村を通して、財政基盤の弱い地方自治体の現実を描く。

216 5月17日

大道芸人

創作舞踏家、ギリヤーク尼ヶ崎さんは、街頭に拘り観客からの投げ銭で生計を立てる。道行く人たちが足を止める魅力とは。

217 6月21日

刑場の記憶から ～元看守長の独白～

戸谷喜一さんは元刑務官。今も記憶から消えない死刑囚や囚人たちの姿を自分の体験記として書き残すことにした。

218 8月16日

刺された明日 ～ある犯罪被害者と家族～

大阪・此花区に住む看護師の林裕子さんは、帰宅途中に見ず知らずの男性に刺された。夫は、犯罪被害者の会を結成する。

219 9月20日

シネマ・セラピスト ～素人介護の2か月～

映画プロデューサーの前田勝弘さんは、脳梗塞でリハビリ中。男性が2か月間介護することに。奇妙な同居生活が始まった。

220 10月18日

はぐれ弁護士 ～元山口組顧問弁護士のそれから～

山之内幸夫弁護士は、かつての山口組の顧問弁護士。「はぐれ弁護士」のユニークな生き様を描く。

221 11月15日

死刑囚の手紙

死刑囚、袴田巖さんは32年間、無罪を訴え続けている。秋山弁護士は、袴田さんの手紙を新証拠として東京高裁に出す。



第35回 ギャラクシー賞 奨励賞



第36回 ギャラクシー賞 選奨
1998年度 JCI賞 奨励賞
第6回 坂田記念ジャーナリズム賞



第38回 日本テレビ技術賞

222 11月29日

笑いはとどくか！ ～聴覚障害に挑んだ吉本字幕寄席～

耳が不自由な人にも寄席を届けられないか、と吉本興業が取組んだ字幕寄席。聴覚障がい者800人が招待された。

223 12月13日

アパートのセラピストたち ～脳卒中リハビリ日記～

脳梗塞で倒れた前田勝弘さん。人々に支えられ少しずつ、言葉と気力を取り戻すリハビリ日記。

1999年

224 1月17日

在宅介護 ～震災4年・老人介護は今～

高齢者介護の問題は、神戸の被災地で顕在化した。2組の在宅介護のケースを検証する。

225 2月21日

薬害ヤコブ病 ～見過ごされた警告～

谷たか子さんの闘病生活を中心に薬害ヤコブ病を取り巻くこの1年間の様々な動きを検証する。

226 3月14日

仮の町から ～それぞれの生活再建～

1999年3月で神戸市は仮設住宅全廃を掲げる。だが、次の住まいが決まらない人は多い。仮設住宅の現状を追う。

227 4月18日

ふつうのままで ～ある障害者夫婦の日常～

奈良に住む藤本隆二さん、弘子さん夫婦は、ともに脳性まひによる重度の障がい者。藤本さん夫婦と夫婦を支える人々の結びつきを描き、自立とは何かを考える。

228 5月16日

さよなら20世紀 ～老政治家の極私的回想～

最長老国会議員、原健三郎氏、92歳。議員生活54年、1900年代の日本を「ハラケン節」で振り返る。

229 6月20日

消えたアリバイ ～滋賀・日野町殺人事件～

飲み屋さんの女性店主の強盗殺人容疑で逮捕された阪原弘さん。えん罪を訴える阪原さんに最高裁判決の日が近づく。

230 8月1日

熊野の異邦人 ～気ままに自分流～

ブラジル移民の岡富士男さんは16年前、故郷の和歌山県古座町に戻った。自分らしく生きることを考える。

231 8月15日

生と死の日記 ～わが学友・特攻に死す～

古川正崇さんは、特攻隊で戦死した。残された日記や手記を同級生が、遺稿集として出版することになった。



1999年 国際エミー賞 最優秀賞
1999年 日本賞 審査員特別推奨
第19回 地方の時代映像祭審査委員会
推奨

232 9月19日

残された人々 ～在日韓国人軍属の戦後補償～

滋賀県甲西市に住む姜富中さんは、軍属として戦い右目の視力などを失った。国を相手に戦後補償を求め裁判を起こす。



2000年 民放連盟賞 優秀賞
第20回 地方の時代映像祭 優秀賞

233 11月14日

転職する男

人生80年代が到来し、生涯に2度職に就く時代に。サラリーマンなどを辞め、ダンス教師などに転じた4人の日常。

234 11月21日

カミングアウト ～先生のレズビアン宣言～

大阪の高校教師、池田久美子さんはある日、生徒に性的マイノリティーであると告白。同性愛者への偏見などを訴える。



2000年 民放連盟賞 優秀賞
第37回 ギャラクシー賞 奨励賞

2000年「映像'00」

235 1月16日

寒風の被災地 ～震災5年路上生活者は今～

阪神・淡路大震災から5年。被災地では路上生活者が急増。公園で暮らす被災者の暮らしを通して震災5年目の現実を伝える。



236 2月20日

北アイルランドからの使者

兵庫県の牧師ヒューブラウン氏は元テロリスト。少年院などに出向き、命と平和の尊さについて体験を交え語り続ける。

237 3月5日

女優96歳 ～澤蘭子の歩いた道～

女優、澤蘭子さんは、ドイツで貴族的生活を送るが、敗戦で帰国。波乱万丈の人生を貴重なフィルムや写真を交え描く。

238 3月12日

迷走する血液行政 ～薬害エイズ 和解から4年～

薬害エイズ、原告団の花井十伍さんは、厚労省側と議論がかみ合わない。花井さんを通して、血液行政の迷走ぶりを描く。

239 4月16日

それぞれの山の学校 ～127年目の閉校～

京都・丹後半島の小学校が閉校した。子どもたちの最期の1週間の表情と閉校に寄せる人々の思いを綴る。

240 5月14日

声なき声 ～無年金の在日外国人障害者～

障がいがありながら、「障害基礎年金」が受け取れない在日朝鮮人2世、金珠栄さん夫婦のケースを検証する。

241 7月16日

とどかぬ怒り ～検証 能勢ダイオキシン汚染～

大阪・能勢町のゴミ焼却施設からダイオキシンが検出。ガンなどに苦しむ2人のケースを通して被害の実態を伝える。



第38回 ギャラクシー賞 奨励賞



2001年 国際エミー賞 入選
2001年 アジアテレビ賞 入選



第8回 坂田記念ジャーナリズム賞



第38回 ギャラクシー賞 奨励賞

242 8月20日

生まれ来るわが子へ ～薬害エイズ被害者夫婦の選択～

衆院議員の家西悟さんは、妻の妊娠が分かる。HIV感染のリスクを心配したが、結果は陰性。妻は無事、女兒を出産する。

243 9月10日

かく闘えり ～在日韓国人軍属の戦後補償～

姜富中さんに弔慰金が支給されることになった。しかし、政府からの謝罪の言葉は、一切なかった。姜さんの姿を追い「戦後」を迎えられずにいる人の思いに迫る。

244 9月17日

70歳の海

70歳のヨットマン鹿島郁夫さんは、世界最高齢の単独無寄港世界一周に挑戦。無寄港は、断念したが無事、世界一周を終える。その全記録。

245 10月22日

さいはての大地で ～国労闘争団の14年～

北海道音威子府の小さな闘争団の14年を辿りながら、国鉄改革の「負」の部分を改めて浮き彫りにする。

246 11月19日

光かすかに ～スティーブンス・ジョンソン症候群被害～

薬の副作用で発症するといわれる劇症性の疾患。3人のSTS患者のケースを追い、実態と被害救済を問いかける。

2001年「映像'01」

247 1月21日

僕らの挑戦 ～今風若者ボランティア奮闘記～

不良少年だった鄭成光さんは、ボランティアに参加し、初めて感謝される。茶髪にピアスの若者のボランティア活動に密着。

248 2月18日

ほったらかしで子は育つ ～「肢体不自由児」の子育て記～

大阪・西成区の中久保一美さんは、障がいのある2人の娘を育てる。モットーは、ほったらかし。ユニークな子育ての日々。

249 3月4日

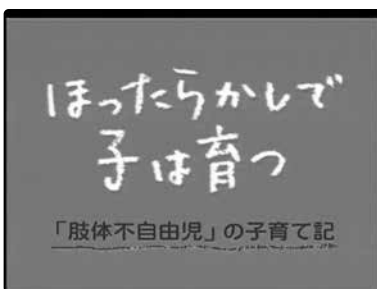
終着駅のむこう ～国労闘争団の家族たち～

北海道音威子府の闘争団に加え、鹿児島県志布志など3つの闘争団の闘いを家族の絆を通して描く。

250 3月18日

崩れ行く歴史街 ～京都・マンションラッシュ～

京都の景観運動に取り組む木村万平さんは、マンション建設を食い止めなければ、京都の景観は崩壊すると訴える。マンション建設の実態と京都市の姿勢を検証する。



第38回 ギャラクシー賞 選奨
2001年 ユニセフ子どもの権利賞
グランプリ



2001年 民放連盟賞 優秀賞

251 4月15日

この国で暮らしたい ～中国人家族に強制送還の危機～

魏麗霞さんは突然、在留資格を取り消された。嘆願書や署名を集める友人たちと魏さん家族の思いを描く。

252 5月20日

つれあい ～丹後・味土野物語～

京都・丹後半島の村に移り住んだ梅本好彦さんは、ボランティアで目、耳、言葉が不自由な辻本久代さんと出会う。二人は、やがて惹かれ合い交際が始まる。



2002年 民放連盟賞 優秀賞
第39回 ギャラクシー賞 選奨
2002年 上海テレビ祭 入選

253 6月10日

天才発掘 ～ヴァイオリンを持った天使たち～

2001年で54回目となる「全日本学生音楽コンクール」、数少ない天才発掘の場だ。ヴァイオリン部門に出場する少年たちに密着する。

254 7月15日

21世紀を描いた子供たち

1981年、神戸ポートピア博で小中学生が描いた21世紀の未来図。あれから20年、絵が本人に返されることになった。

255 8月19日

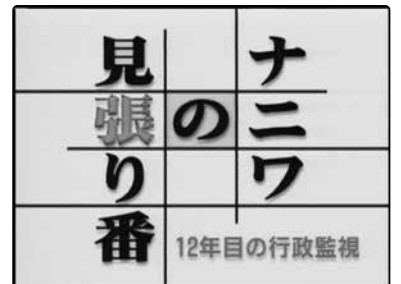
生きてこそ ～敦至君6年目の介護記録～

桑山敦至くん、13歳は、交通事故で意識の回復は望めないと告げられた。桑名さん一家の介護生活が始まった。

256 9月9日

ナニワの見張り番 ～12年目の行政監視～

松浦米子さんは、市民グループ「見張り番」を作って12年になる。この夏、松浦さんは、オリンピック招致活動に関して動き始める。すると…。



第39回 ギャラクシー賞 奨励賞

257 10月21日

出所した男

1991年、5歳の男児が浴室で溺死し、母親の愛人、河合利彦さんが逮捕された。河合さんは、冤罪を訴えるが…。



第57回 文化庁芸術祭賞 優秀賞
2002年 民放連盟賞 最優秀賞
第44回 JCI賞

258 11月18日

木津川村の清吉 ～記録を残さなかった男の一生～

阿波の国・木津川村の農民、清吉は、1911年に死んだ。記録などを残さなかった名もなき人の一生を追跡する。

259 12月9日

商店街のフォークシンガー ～古川豪からのメッセージ～

かつて関西フォーク界の担い手の一人だった古川豪さんは、2000年に26年振りとなる4枚目のアルバムを出した。古川さんの目からみた現代社会へのメッセージを伝える。

2002年「映像'02」

260 1月20日

薬害ヤコブ病 ～和解への道のり～

脳がスポンジ状になり急速に植物状態になるヤコブ病。滋賀県の谷三一さんは、汚染された乾燥硬膜が原因で妻のたか子さんを失った。谷さんは、旧厚生省を相手に訴えを起こし、和解に至る。5年間の記録。

261 2月17日

うた★島めぐり

テノール歌手で武庫川女子大の音楽の先生、畑儀文さんは、合唱経験がない離島の子どもたちを集めコンサートを開く。

262 3月17日

あなたへの手紙 ～阿南慈子・命の押し花～

阿南さんは2001年11月、47歳で亡くなった。31歳で難病を発症、失明し、首から下は動かなくなったが、口述筆記で詩やエッセイを執筆。命の尊さ生きることの大切さを考える。

(以降、日曜日深夜 0:30～)

263 4月21日

なんてん共働サービスの人々

滋賀県にある「なんてん共働サービス」の社員13人のうち6人は障がい者。溝口社長は、障がい者だけで集まっても自立は出来ない、と会社を作った。

264 5月12日

女優・藤山直美

藤山直美さんは、藤山寛美氏の三女。父の13回忌追善公演に取り組む8か月に密着。関係者が、彼女の素顔を語る。

265 6月16日

家族のかたち ～ある里親家庭の9か月～

9歳の夏美ちゃんと4歳の桃花ちゃんは、両親の離婚トラブルとその後の養育拒否で2年前、千葉県の日高さん一家の里子に。施設では味わえなかった家族の暮らしを送る。

266 7月14日

炎のダンス ～ツッパリ先生と60人の子どもたち～

京都府精華町の小学校教諭、今村克彦さんは「今村組」というダンスチームを主宰。メンバーの中心は、問題行動や家庭の悩みを抱える。今村組は、ヨサコイソーラン祭りに初挑戦し、「炎のダンス」を繰り広げる。

267 8月18日

風を感じて ～セーリングに懸ける障害者たち～

ヨットを通じて障がい者に生きがいを感じてもらおうという「セーラービリティ」に取り組む藤本増夫さんの日々。

268 9月15日

ヤグラの暑い夏 ～河内音頭の世界～

河内音頭は、関西の夏を彩る。様々なグループのそれぞれの河内音頭を伝える。



第27回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞



2003年 アジアテレビ賞 第2位

269 10月20日

おさわがせしました ～和歌山市長選騒動記～

和歌山の旅田卓宗市長が辞任。暴力団との交際疑惑、愛人疑惑など毎度、お騒がせ市長の選挙戦に密着。

270 11月17日

走る女

～全盲ランナー、還暦で100キロマラソンに挑戦～

鈴木政子さんは、60歳になる盲目のランナー。政子さんは2001年に棄権した丹後半島の100キロマラソンに再挑戦する。

271 12月8日

1万回死んだ男 ～刹那に懸ける斬られ役～

小峰隆司さんは、69歳、現役最年長の斬られ役。これまでに1万回は死んだという小峰さんの生きざまを描く。

2003年「映像'03」

272 1月19日

舞に狂うて ～万作と佳卓～

92歳の日本最古の舞踏流派志賀山一流の十世家元、中村万作さんに大衆演劇の人気者、宮北佳卓さんが入門。やがて万作さんから秘伝の舞が授けられる。



第40回 ギャラクシー賞 奨励賞

273 2月16日

さまよう異邦人 ～アフガン難民申請者たち～

東大阪に住むムハド・アミンさんは、タリバーンの迫害を逃れ日本政府に難民申請したが認められず、取り消しを求めて裁判を起す。日本の難民問題の現状を考える。

274 3月16日

消えたアリバイ ～滋賀・日野町殺人事件～

最高裁で無期判決を受けた阪原さんは服役中だ。無実を訴え再審を求める中、新証拠が見つかり一筋の光が差してきた。



第23回 地方の時代映像祭 優秀賞
第40回 ギャラクシー賞 選奨

275 4月20日

離れたくない ～中国人家族に強制送還の危機～

熊本県に住む井上晴子さんは、中国残留邦人だった叔父と暮らすため5年前に来日。しかし、叔父と血縁関係がないため強制退去命令が出る。

276 5月18日

再びの棲家 ～検証・被災マンションの8年～

阪神・淡路大震災で問題になった被災分譲マンションの復興。建て替えか、補修かで、住民同士が対立して訴訟に発展した。

277 6月15日

盾になった人 ～イラク戦争と反戦市民運動～

イラク戦争を止めるために「人間の盾」として戦時下のイラクに留まった日本の市民たち。市民による反戦運動を考える。

278 7月21日

17歳・ジャズピアニスト

17歳の高校生ながら、天才ジャズピアニストといわれる関西在住の松永貴志さんにスポットを当てる。

279 8月17日

誇大妄想の都へ ～ヤノベケンジEXPO'03～

造形作家ヤノベケンジ氏に密着し、自らの原点である万博会場跡の国立国際美術館での展覧会オープンまでを追う。

280 9月28日

暴力団被害者達は今 ～ひとり娘を亡くした母の闘い～

18年前、兵庫県で起きた暴力団抗争の巻き添えで堀江まやさんが、亡くなった。母親は、半生を暴力団根絶にかける。

281 10月19日

チャレンジドたち ～ナミねえの挑戦～

障がいのある娘を持ち、障がい者の社会的な自立を考える一人の女性が、新たな制度作りを目指して活動する姿を追う。

282 11月23日

芝居なんぞに明け暮れて

脚本家、演出家でもあるマキノノゾミさんと女優で妻のキムラ緑子さん。「芝居」に生涯をかける人間の尋常ならざる人生を追う。

283 12月14日

おとんはおかん ～性同一性障害と家族～

性同一性障がいと診断されカミングアウトした大熊ひかりさんに密着。人間が“自分らしく生きる”ことの意味を問う。

2004年「映像'04」

284 1月18日

漁師になる！都会から街へ ～Iターンサラリーマン組奮闘紀～

人手不足に悩む日本の近海漁業の現実と、変わりゆく漁村の姿。脱サラからIターンして漁師になった元営業マンの情熱と奮闘ぶりを追う。

285 2月15日

つぐなう ～リンチ殺人 加害少年と遺族の対話～

加害者と被害者を対面させ、加害者には罪の深さを認識させ、被害者の心の傷をも癒そうという試み。その功罪を検証する。

286 3月22日

今ここから始めたい ～フリースクール子ども館～

日本に13万人いるといわれている不登校児童。2年前、京都府に出来たあるフリースクールを通して、不登校の子どもたちとわが子に向き合う親の姿を追う。



第29回 ゴールデンチェスト
国際テレビ祭 入選



第41回 ギャラクシー賞 選奨



第29回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞

287 4月18日

負けへんで！ ～西宮冷蔵・告発のゆくえ～

雪印食品の牛肉偽装を告発した西宮冷蔵の水谷洋一社長。告発後、西宮冷蔵は取引先の撤退などで、倒産状態に。会社再建を目指して奮闘する水谷社長に密着する。

288 5月16日

双子兄弟の離島留学記

大阪から鹿児島の人口200人の離島に留学する小学校5年生の双子を通して、子どもたちに本当に必要な豊かな教育とは何かを考える。

289 6月20日

野外授業 ～化学物質過敏症の生徒たち～

微量の化学物質で目・鼻・のどの痛みなどのアレルギー症状などを引き起こす現代病、化学物質過敏症。この症状で学校へ通えない「シックスクール問題」の現状を伝える。

290 7月18日

偽証 ～福井・女子中学生殺人事件～

1986年、福井で女子中学生が殺害された。暴力団員は、自分の罪が軽くなる条件で友人の前川彰司さんが犯人と申し出た。一審は「証言は虚偽」と無罪判決、二審は逆転有罪、上告棄却で有罪が確定した。前川さんは無実を主張、出所後、再審請求に踏み切った。

291 8月8日

16才 ～リカとケイタ・思春期の子育て～

兵庫県尼崎市の有坂圭太さん(16)と仲川吏香さん(16)は、子育て中。法律で婚姻は、夫が18歳になるまではできないため未入籍。一方“未成年でも婚姻で成年になった”とみなされ、2人の児童扶養手当は打ち切られた。未成年夫婦の子育て奮闘生活を追う。

292 10月17日

山猿ジャーナリスト ～68歳・丹波自給自足生活～

農作物などの自給率が下がる現状に疑問をもち、兵庫県の山里で自給自足生活を送るジャーナリストに半年間密着。日本の農林業や「人間らしい生き方」について考える。

293 11月21日

37年目の真実 ～茨城県布川殺人事件～

37年前に起った「茨城県布川強盗殺人事件」。この事件で無期懲役となった2人の男性が、「冤罪」を訴えて闘っている。捜査記録や裁判記録などから事件を再現、2人がどのようにして「冤罪」に巻き込まれていったのかを検証する。

294 12月12日

あい・織の四季 ～化学物質過敏症とともに～

染織家、清水あいさん(29)。天然素材を使った染め織りの仕事をしているのは、わずかな化学物質にも反応して体調を崩してしまう“化学物質過敏症”の患者だからだ。“化学物質過敏症”に悩み、症状と闘いながら出産に挑戦する女性の姿を追う。



第11回 上海テレビ祭 入選
第45回 モンテカルロテレビ祭 入選
第30回 ゴールデンチェスト
国際テレビ祭 入選

2005年「映像'05」

295 1月16日

単身赴任 ～父の五・七・五・七・七～

小林信也さんは、大手保険会社の課長で、現在50歳。大阪に単身赴任中。現代歌壇を代表する歌人・永田和宏さんが主宰する短歌結社「塔」に所属し、家族や職場を独自の視点から詠む。



第42回 ギャラクシー賞 奨励賞

296 2月20日

夢の新薬の幻想 ～抗がん剤イレッサ副作用被害～

2002年「イレッサ」という肺ガン治療薬が世界で初めて日本で承認された。副作用がなく画期的な治療効果があるというふれこみだったが、2年半で588人が副作用で死亡した。イレッサの副作用被害を検証する。

297 3月6日

いつか家族になれるよう ～認知症老人の家～

2004年10月、奈良にグループホームが建設された。12人のお年寄りを受け入れている。認知症患者の心に寄り添うことの意味を日々模索している。

298 3月20日

働き者 シュミットさん ～ドイツ人ベンチャー奮闘記～

バブル崩壊以降、低迷を続ける景気。そんな日本で2004年9月、「ドイツ人ベンチャー」がたった一人で、独自の技術を引っ提げ、不況の街、東大阪に乗り込んだ。

299 4月17日

牧場と子どもたち

親の暴力を受けていた子、事件を起こし裁判所から送られてきた子、様々な子どもたちが、動物と共に暮らす一年を描く。

300 5月15日

このまま そのまま あるがまま ～ダウン症・家族の6年～

着床前診断など「命を選択する」風潮とは対照的に、授けられた命をあるがままに受け入れてきた家族の6年間の記録。

301 6月12日

置き去りの60年 ～中国残留孤児集団訴訟～

2005年7月、全国で初めて大阪地裁で裁判が下される中国残留邦人による集団訴訟。中国に取り残された人たちの戦後60年を考える。

302 7月17日

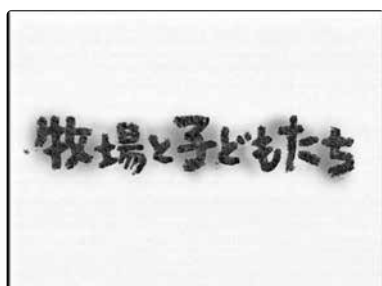
4・25 ～JR脱線事故を語る～

死者107人、けが人500人以上を出す大惨事となったJR福知山線の脱線事故。被害者9人へのインタビューを通し、事故の真相を伝える。

303 7月31日

攻める株主 ～巨大組織に挑む男たち～

投資グループ「村上ファンド」の村上世彰代表への単独取材も含め、「攻め」に転じたニッポンの株主を浮き彫りにする。



第31回 ゴールデンチェスト
国際テレビ祭 入選

304 8月21日

イラクに行つて参ります ～'05年反戦運動と自衛隊～

イラク派遣から1年半以上が経つが、最近も、隊列近くで爆発があったり、宿営地内に迫撃砲が撃ち込まれたりと危険が伴う。イラク戦争・自衛隊派遣の意味を複眼的に考える。

305 10月16日

祖国よ ～中国残留孤児の戦後～

2005年7月、中国残留邦人による集団訴訟で大阪地裁が下した判決は「国には責任はない」というものだった。原告の男性の姿を通し、戦後60年を考える。

306 11月27日

路上で見た夢 ～ホームレス自立支援施設の日々～

大阪市のホームレス自立支援施設に密着。入所者を定職に付かせることを目標にし高い成功率を収めながらも一方で様々な葛藤をかかえるなどホームレス自立支援の現状を描く。

307 12月11日

独り語り ～91歳の戦争出前噺～

和歌山県みなべ町に戦争体験を語る91歳の男性がいる。「語り部」の生き方を通して、「戦争と平和」を考える。



第43回 ギャラクシー賞 奨励賞
第13回 坂田記念ジャーナリズム賞

2006年「映像'06」

308 1月15日

証拠開示 ～39年目の真実～

1967年8月に茨城県布川で発生した殺人事件で無期懲役となった2人の男性が、今も無実を訴えている。事件発生から再審開始までの40年間を映像とインタビューでたどる。

309 2月19日

届かぬ叫び ～原爆症認定を求めて～

原爆症認定を求め、訴訟を起こしている人々の姿を追ひ、もうひとつの「戦後60年」を考える。

310 3月19日

ぼちぼちはうす ～障害者自立支援法の波紋～

2006年、「障害者自立支援法」が施行され、利用料の1割負担が求められる。法律で利用者が減り閉鎖の危機にある小さな障がい者施設に密着、法律の問題点を浮き彫りにする。

311 4月16日

誰も知らない戦地出張 ～もの言えぬ職場から～

イラク戦争で企業の社員が危険な地域に派遣されている。問題だと声を上げる労働者は抑え付けられ、職場から戦争協力につながる日本の危うい現状を取材した。

312 5月21日

女ざかり・男ざかり ～ファドがわかる年になってきた～

高齢の女性と男性がタッグを組んで新しいことに挑む、人生賛歌を描く。



第31回 JNN ネットワーク協議会賞
奨励賞

313 6月18日

今を刻んで ~若年認知症とともに~

65歳未満で発病する若年認知症。家族の名前や顔さえ忘れながらも、懸命に生きる本人と家族の姿を通し、社会的支援の必要性と夫婦の関係や生きることの意味を問いかける。

314 7月16日

人はニートというけれど

ニート支援には、行政も専門家も確たる解決策を見出せていない。厚生労働省がニートの援助で設立した職業研修施設「若者自立塾」の生活や、卒業生のその後を追う。

315 8月20日

正社員になれない若者たち

~規制緩和が揺るがす日本型雇用~

1986年に人材派遣法が、施行されて20年。労働者の3分の1は、非正社員となった。派遣労働者の現状を追いながら様変わりした労働現場の問題点を浮き彫りにする。

316 9月17日

choriと童司 ~コトバの自由形~

詩人としてライブを行なう chori さん (21) と大蔵流狂言師・茂山童司さん (23)。詩と狂言のコラボレーションを試みる2人に密着。京都のサブカルチャーに身を置く若者たちを描く。

317 10月15日

法衣をぬいで ~型破り判事の転身~

新しい考え方を取り入れて少年審判運営を推進した井垣康弘さん。喉頭がんで声帯を切除し人工声帯になり、判事を定年退官してから弁護士に転身した井垣さんを追う。

318 11月19日

被爆61年 ~終わらない認定裁判~

被爆から61年経った今も、原爆症と認められず、被害に苦しむ人々の姿を取り上げ、裁判という最後の手段で、国の「切捨て行政」のあり方を問う被爆者の闘いを追う。



第40回 US 国際映像祭 第3位
2007年 アジアテレビ賞 審査員推奨
第9回 四川テレビ祭 入選
2008年 ニューヨーク・フェスティバル
銅賞

2007年「映像'07」

319 1月21日

KAROSHI ~労災認定の厚い壁~

2006年、過労死の労災申請は過去最高に。過労で起きた転倒事故で後遺症がある男性と家族を追い、過労の現場を検証する。

320 2月4日

市長、お手並拝見 ~奈良・生駒市政の365日~

日本では多くの自治体が借金を抱え、財政難に追い込まれる。厳しい財政運営を迫られる奈良県生駒市の実態を伝え、自治体の再建をさまざまな目線で考える。

ドキュメンタリーとはつまり「異議申し立て」である。権力に向けて、あるいは多数派に向けて、「それは間違っている」と表明すること。私は当初、そのことに全く気付いていなかった。貝谷さん（初代プロデューサー）から「君のテーマはいつも難しすぎる」と叱られた時も、その意味が分からなかった。「映像」という言葉から、これまでなかった新たな映像表現が求められている、という気負いがいつもどこかにあった。戦争や公害や基地問題や政権の汚職や、そういうものから距離をおいて、青春、芸術、人生、そういうテーマに映像で切り込んでいきたかった。小さな失敗作や大きな失敗作を作り続けたが、後悔はしていない。40歳を過ぎたころに「冤罪」に出会って、自分の中の「怒り」に気づき、これを作品に変えていけば、仕事の中に「怒り」を沈めることができると分かった。この時、初めて、映像とは「異議申し立て」であると納得した。

今、大学で学生と一緒にドキュメンタリーを作っている。「心の中のもやもやを吐き出すこと」がドキュメンタリーの原動力だと言っている。大人たち（政治家でもいい、大学の教員でもいい）への「異議申し立て」をそそのかしている。一方で、「見たこともない、とんでもないもの」を作ってほしい、とも言っているが、この10年、そういう映像には出会わなかった。だれも見なかった映像。その夢は、私の中でまだ消えていない。

「映像」が40年も持ちこたえた、と聞いたら既に亡くなっている先輩プロデューサーも喜んでくれると思

う。今泉俊昭さんはこの上なくさっぱりした人だった。番組評はいつも一言。「いいね」は誉め言葉。「次、頑張る」はダメなとき。その二種類しかないが、一度だけ「すごく良かった」と言われた。何の番組かは覚えていないが、その言葉は忘れられない。久坂信輔さんは非常にシャイな人だった。大事なことも茶化してしまう。私が気取った原稿を書いたりすると「すぐ人をだまくらかすんだ、お前は」という。叱られているのか、評価されているのか、判明しないままだったが、ある時、若い記者の原稿を校正しながら、「こいつに、お前くらいだまくらかす技術があったらなー」とぼつんと言った。あ、誉め言葉だったんだ、と嬉しくなったことがある。山本俊樹さんは天才肌で、かつ努力家だったが、人にそれを見せなかった。あるコンクールにどの作品を出すのか、聞かれたことがある。私は、Aという作品が今年は出色だったと返答したが、山本さんは黙っている。同じ評価だったはずだが、と思っていると、そのコンクールの審査員の一人一人について語り出した。さらに、彼らの選考の傾向まで過去に遡って考慮し、そのうえで、「Bはどうか」というのである。「賞」を「番組の存続のための道具」と冷徹に捉え、それに向けて徹底的に調べる。あきれると同時に感服した記憶がある。

お三人とも将棋にうるさい人たちだった。その時だけ、完全に子供に戻った。企画や取材の話もまるで聞いてもらえなかった。振り返れば懐かしい。お花畑とは言わない、手入れの悪い森のような、しかし居心地のいい職場だった。



● 里見 繁（元ディレクター・プロデューサー）

SATOMI shigeru

1951年生まれ。毎日放送報道記者を経て、2010年より関西大学社会学部教授。

ディレクターとして「出所した男」（芸術祭賞受賞）「彼女は嘘をついたのか」（ギャラクシー賞優秀賞受賞）など多くの受賞作を製作し、プロデューサーとして「私は生きる」（日本放送文化大賞受賞）「夫はなぜ、死んだのか」（地方の時代グランプリ受賞）などを手掛ける。著書に「死刑冤罪～戦後6事件をたどる」「冤罪～女たちのたたかい」（共にインパクト出版会）ほか。

321 2月18日

加奈の家族写真

両親と子どもたちが離れて暮らす中国残留邦人の家族。日本で働き定時制高の写真部で活躍する高校生の娘を中心に、中国で暮らす両親の姿も交え「家族とは何か」を考える。



2007年 日本放送文化大賞 グランプリ
第44回 ギャラクシー賞 奨励賞

322 3月18日

私は生きる ～JR福知山線事故から2年～

死者107人、負傷者500人を超えたJR列車脱線事故。生死の境をさまようほどの重傷を負いながら、奇跡的な回復を遂げた鈴木順子さんの回復の過程を追う。

323 4月15日

父のまなざし ～難病の父から子ども達へのメッセージ～

兵庫県芦屋市の西村隆さんは10年前、ALSになった。かすかに動く足を使ってパソコンに向かい、子供たちへメッセージを伝える隆さんを追い、家族のあり方を考える。



第45回 ギャラクシー賞 奨励賞

324 5月13日

見えない障害 ～高次脳機能障害者の苦悩～

高次脳機能障害はいは、病気や事故で言語、感情の障がいが残る。身体的には障がいが残らず、自覚症状にも乏しいために周囲の理解が得られず、苦しむ人は少なくない。

325 6月17日

種採り人 ～消えゆく食を求めて～

野菜などの種の自給率は低く、伝統野菜は姿を消している。幻の在来種を追い求めて歩く男性に密着、農と食を考える。

326 7月15日

消えゆく記憶 ～若年認知症と闘う夫婦の一年～

奈良に住む出雲久子さんは8年前、57歳の若さで、アルツハイマー病を発病。症状は進み徘徊が、止まらない。出雲さん夫婦などに密着。二組の夫婦の姿を一年間追い続けた。

327 8月19日

老後を生きる ～生活保護と老齢加算～

生活保護の申請を躊躇した末に起きた事件や老齢加算廃止となった男性を追い弱者切り捨ての現場を検証する。

328 9月16日

望郷の果てに ～元シベリア抑留者の戦後60年～

敗戦後、シベリアなどに連行された人たちは、強制労働の未払い賃金を求めてきたが、最高裁で請求が棄却された。シベリア抑留者たちの終わらない戦後の闘いを追う。

329 10月14日

父から息子へ ～琵琶湖畔・命を育む農業～

滋賀県の琵琶湖で有機無農薬の稲作に取り組む一家の種蒔きから稲刈りまでを追う、自然や環境への関わり方を考える。

330 11月18日

二セ米を追う

2006年9月から1年をかけて追跡した「二セ米のからくり」と偽装の一方で、一粒の米に魂を注ぐ新潟の魚沼コシヒカリ農家も取材しながら、終りなき偽装社会を問う。

331 12月9日

夫はなぜ、死んだのか ～過労死認定の厚い壁～

トヨタの正社員として工場働く夫が、30歳で過労死した。夫の過労死認定を求めて裁判を闘う妻の日常を通して、隠蔽される長時間労働の実態を暴く。



第28回 地方の時代映像祭 グランプリ
第45回 ギャラクシー賞 優秀賞
2008年 民放連盟賞 優秀賞
第34回 放送文化基金賞 番組賞
第32回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞

2008年「映像'08」

332 1月20日

ウトロ・置き去りにされた町

京都・宇治にあるウトロ地区の土地明け渡し訴訟で2007年、韓国政府が国会で予算を計上し、資金を援助するという異例の措置を取った。ウトロの人々を18年前の映像を交え描き、戦後60年間放置されたウトロ問題を追う。

333 2月17日

遅すぎた警告 ～検証 薬害C型肝炎～

2008年、薬害C型肝炎被害者の一律救済を目指す法律が成立。被害者の実情を追い、被害拡大させた要因を追及する。

334 3月16日

いのちと性(SEX) ～助産師さんから子ども達へ～

10代の人工妊娠中絶がこの10年でほぼ倍増した。神戸で「命と性を語る」授業を続ける助産師さんにスポットを当て、「性と命」のメッセージを伝える。

335 4月20日

家族の再生 ～ある児童養護施設の試み～

京都の児童養護施設で暮らす子どもたちと彼らに寄り添う職員の8か月に密着。家族の絆とは何かを問いかける。



2008年 民放連盟賞 最優秀賞
第35回 放送文化基金賞 番組賞

336 5月18日

見捨てられた病 ～ウイルス性難病と闘う日々～

難病でありながら国からの支援もなく、難病を理由に会社を解雇された男性を追いつながら、この国の難病行政を検証する。

337 6月8日

沈黙の棲家 ～千里ニュータウン・再生の陰で～

大規模ニュータウン、千里ニュータウン。「オールドタウン」と呼ばれたが、再生が進む中、高齢者が「合法的に」追い出される。「建て替える権利」と「住み続ける権利」の現状を追う。

338 7月20日

支え、支えられ ～介護の現場から～

介護現場は深刻な人手不足。過酷な労働と低賃金から離職者が続出。そんな中、「介護にハマる」女性介護士の日常を追いつ、介護という仕事の魅力を考える。

339 8月17日

いま、病院で起きていること ～医療崩壊と闘う医師たち～

減り続ける勤務医の数、それに伴う医師の過酷な勤務状況…。大阪・堺市の病院に密着、医療政策の欠陥を浮き彫りにする。



第46回 ギャラクシー賞 優秀賞
第29回 地方の時代映像祭 優秀賞

340 9月14日

彼女は嘘をついたのか

痴漢をしたとして実刑判決を受けたが、冤罪を訴え出所後、再審請求を起そうとする男性にスポットを当て、痴漢冤罪として初めての再審請求に取り組む弁護団と男性を追う。

341 10月19日

なぜ警告を続けるのか

～京大原子炉実験所・"異端"の研究者たち～

脱原発か推進か。地震大国日本で、原発は安全なのか？原子力の安全利用に挑む科学者たちを追い原発問題を考える。



第46回 ギャラクシー賞 選奨

342 11月16日

ひきこもる大人たち ～閉ざされた心と向き合う～

ひきこもりは長期化、30代、40代など年齢が高くなっている。ひきこもりの当事者とその家族、支援団体の姿を追う。



第46回 ギャラクシー賞 奨励賞
第16回 坂田記念ジャーナリズム賞特別賞

343 12月14日

息子は、工場で死んだ

～急増する非正規労働者の労災事故～

偽装請負で働き、劣悪な労働で亡くなった男性と両親を追い、偽装請負はなぜ、放置され続けるのかを浮き彫りにする。

2009年「映像'09」

344 1月18日

二番・セカンド 土井

元プロ野球選手、土井正三氏。選手としては評価されたが、監督としては「イチローの才能を見抜けなかった男」といわれた。土井正三氏の野球観と生き様をこれまでとは違う見方で描く。

345 2月15日

曲技飛行士 ～サニーの見た空～

日本で2人しかいないアクロバット飛行のプロ横山真隆さんに密着。横山さんの妙技を躍動的に紹介する。

346 3月15日

十六歳の瞳 ～ボクサー 里樹の挑戦～

高校1年、松井里樹くんは、3歳からボクシングを始めたが、中学1年の時、練習中に目のケガを負う。医師から「続けるのは難しい」と告げられても、世界チャンピオンを目指す。父と二人で夢を追う日々を紹介する。

(以降、日曜日深夜 0:50 ~)

347 4月26日

私は告発する ~54歳、左遷された男~

三菱重工の不正を告発した54歳の男性を追い、左遷されても企業と闘う姿を通して、企業の隠蔽体質を浮き彫りにする。

348 5月17日

DNA鑑定の呪縛

科警研が最初に開発したDNA鑑定の重大な欠陥に迫り、過大評価されてきたDNA鑑定が産んだ冤罪の構図を検証する。

349 6月21日

歩んでいきたいもう一度

54歳で失明した男性が、失意のどん底から、献身的な妻や、馬術との出会いを通じて、生きる意欲を回復する姿を追う。

350 7月19日

おばさんのカレー ~ある保護司の取り組み~

法務大臣の委嘱を受けて犯罪や非行に陥った人の更生を支援する保護司。犯罪を減らそうと努力を続ける保護司の活動を通して、犯罪を防いでいくことの大切さを考える。

351 8月9日

哲嗣の未来 ~混合型血管奇形との闘い~

「混合型血管奇形」という難病に苦しむ3歳の男の子と家族に密着し、日本の貧困な難病行政の問題点に迫る。

352 9月20日

逃げる司法

裁判でも真実を見抜けない冤罪とは一体、どのようにして起るのか。2つの事件に注目し、日本の冤罪の構造を探る。

353 10月18日

ラッキードラゴンの伝説 ~ヤノベケンジ×水都大阪2009~

現代美術作家ヤノベケンジさんが、制作した機械彫刻作品ラッキードラゴン。ヤノベさんが、この作品にこめたメッセージは何なのか。

354 11月22日

間人(たいざ)の女 ~魚売りのおばちゃんとその家族~

京丹後市の間人。小さな漁師町で夫の自殺と残された借金にもめげずに魚の行商を始めた65歳の女性が、フィリピンから迎えた息子の嫁と衝突しながらも、常に前向きに生きる姿を追う。

355 12月20日

市バス運転手の自殺

30歳代の自殺者は、1978年の統計開始以来、最多だ。2人のケースを追いながら、30歳代が抱える問題を考える。



第47回 ギャラクシー賞 選奨
2009年 民放連盟賞 優秀賞



ワールドメディアフェスティバル2010
グランドアワード



2010年「映像'10」

356 1月24日

加藤登紀子、歌と旅

歌手・加藤登紀子さん。公演の合間を縫って色々な場所に出かける。加藤さんの旅を追い、この40年間に歩んだ道を描く。

357 2月21日

泉南アスベスト禍

～警告から70年・"石綿村"からの問い～

2006年、全国に先駆けて大阪地裁に提訴された大阪・泉南アスベスト国家賠償訴訟の判決が出る。長年にわたり規制や対策を怠ってきた国の責任を検証する。

358 3月14日

心つないで ～杖が藪より～

和歌山県高野町には、限界集落が点在。集落の維持と活性化のために高野町が2009年に募集した「むらづくり支援員」と村人の日常に密着する。

359 4月25日

母との暮らし ～介護する男たちの日々～

高齢の両親や妻を介護し、慣れない家事に追われる男性。深刻な男性介護者の悩みにスポットを当て、男性介護者に対する対策の貧困さを浮き彫りにする。

360 5月16日

きほ と みずき

～大人の階段 車いすで駆けのぼる～

脳性まひで車いすの生活で暮らす姉妹。妹は高校卒業を控え、入学を希望した専門学校に障がいを理由に門前払いをされ、初めて人生の岐路を迎える。

361 6月20日

抵抗の涯てに ～写真家・福島菊次郎の遺言～

国家の「暴力」を告発する報道写真家・福島菊次郎氏。世相やメディアに絶望し、60歳代で離島に移り住むが、病気で生活を断念。89歳になったいま「殺すな、殺されるな、憲法を変えるな」を執筆している。老写真家の最後の闘いを描く。

362 7月25日

逆流 ～凍結ダムの行方～

一度、動き始めたダム事業はなぜ、止まらないのか。「凍結ダム」の実態を伝え、この国のダム行政のあり方を問う。

363 8月15日

子どもたちに伝えたいこと ～劇団キオの挑戦～

児童演劇団の日常を通して、子どもたちの現在と演じる側の思いや試行錯誤を伝え、文化関連の予算削減の是非を考える。

364 9月19日

利休にはなれんかった ～裏千家前家元の戦後65年～

茶道裏千家の前の家元、千玄室氏。戦後、長きにわたって自らの特攻隊での体験について沈黙してきた千氏だが、2010年8月15日には京都市で講演し、自身の体験を話した。



第48回 ギャラクシー賞 選奨
2010年 坂田記念ジャーナリズム賞
2010年 JNN ネットワーク協議会賞 大賞



2010年 民放連盟賞 最優秀賞



2012年 ニューヨークフェスティバル 受賞

365 10月24日

映像30年史・前編

1980年4月に「映像80」としてスタートして以来、2010年で、丸30年を迎えた「映像」シリーズ。プロデューサーやディレクターに苦心や工夫、取材の裏側、さらにドキュメンタリーの将来像を聞く。

366 10月31日

映像30年史・後編

367 11月28日

正しくキレよう！ ～イマドキ労働運動なう～

就職した若者が過重労働やパワハラ、サービス残業など違法の壁に突き当たる。1人で加入できる地域労働組合の若者たちが結集し、立ち上がり始めた。

368 12月12日

殺すな ～益永スミコ 87歳の戦い～

日本の進む方向に危機感を持ち、ささやかな抵抗と行動を続ける87歳の女性の目から、わが国の“現在”を検証する。

2011年「映像'11」

369 1月23日

農業だけで食っていけ ～土作り名人の遺言～

今や瀕死の日本の農業。その再生に望みをつなぐ指導者の姿を追い、日本の農業の現状に迫る。

370 2月20日

大逆事件 ～百年後を生きる～

1910年の大逆事件。「大逆罪」の汚名を着せられた人たちなどの歴史を振り返り、近代日本の“負の遺産”にスポットを当てる。

371 3月27日

母と娘の告白 ～虐待から絆への18年～

2010年、大阪市西区のマンションで母親に置き去りにされた幼い姉弟が餓死した。長年、虐待防止に携わる女性にスポットを当て、自らの娘との十数年にわたる葛藤の軌跡を通じて、現代の虐待について考える。

372 4月24日

Live on ～生き続けるためにできること～

事件を起こした父親の失踪と母親の自殺を経験し、自らも自殺を考えた時期を乗り越えて、自死遺児の支援を模索する女子大生。その姿を通じて、自殺大国の現状と支援の問題点を描く。

373 5月22日

いつか親ばかになる日

2組の里親制度を利用する親子にスポットをあて、現代社会における里親制度の実際を紹介する。

374 6月26日

その日のあとで ～フクシマとチェルノブイリの今～

福島第一原発では、地震で緊急停止し、メルトダウン状態に。チェルノブイリ原発事故の現状も取材し、放射能汚染と向き合わざるを得なくなった「その日のあと」を考える。

375 7月24日

大阪・宮城・福島 ～故郷を離れた家族たち～

東日本大震災によって生活を奪われ、故郷を離れ大阪で生活を始めた2組の家族に密着。被災者が直面する課題を考える。

376 8月21日

ともに暮らす ～「おたっしやハウス」の日々～

ある女性の試みから始まった大阪・千林にある小さな高齢者施設に密着。共同生活を送る高齢者を通して老後の形を探る。

377 9月18日

悲しみ綴る中国の女文字

中国・湖南省に伝わる女文字。中国の農村部に伝わる庶民文化、女文字の歴史と現状を伝える。

378 10月23日

放射能汚染の時代を生きる

～京大原子炉実験所・“異端”の研究者たち～

福島第一原発の事故で、「原子力安全神話」は崩壊した。京都大学原子炉実験所「熊取6人組」の半年の活動と、「原子力安全神話」の陰にいた40年を追い、原発事故の要因に迫る。

379 11月20日

温泉診療所 ～医者と少年と母親と～

栃木県那須湯本温泉にある見川医院は、心の療養に力を入れている。全国でも珍しい温泉診療所の取り組みを紹介する。



第49回 ギャラクシー賞 奨励賞

2012年「映像'12」

380 1月22日

救える命 ～“震災関連死”に取り組む医師～

東日本大震災では、1,000人を超える震災関連死がいると見られている。阪神・淡路大震災の時に「震災関連死」という言葉を生み出した医師に密着。「関連死」を考える。

381 1月29日

福島で生きてゆく ～都会から来た就農者の日々～

原発事故に見舞われた福島。警戒区域や計画的避難区域以外のところでは、多くの人たちが日常生活を営んでいる。悩みながらも福島に留まり続ける県外移住者たちの現状を追う。

382 2月19日

受忍 ～放置され続ける空襲被災者～

戦後、国は「戦争損害は国民が受忍すべき」とし、空襲被害者に補償していない。訴訟に踏み切った高齢被害者たちの思いとともに、国が受忍を強いる構造を明らかにする。



第49回 ギャラクシー賞 奨励賞

383 3月11日

生き抜く ～南三陸町 人々の一年～

人々はどのような思いで、東日本大震災から1年を送ってきたのか。宮城県南三陸町の人々の“生き抜く姿”から、被災地の今を描く。

384 4月22日

ガラスの心 ～虐待する親を癒したい～

自らの虐待体験を公表し、自叙伝として出版した女性社長にスポットを当て、負の連鎖をプラスに変換し、明るく前向きに児童虐待防止に取り組む姿を追う。

385 5月20日

老いを支える ～フィリピンから介護の現場へ～

介護現場に外国人を充てる試みが始まった。課題も多い中、フィリピン人にスポットを当て、介護現場を支える切り札となるのか、来日した家族を追う。

386 6月17日

重信房子からの手紙 ～日本赤軍元リーダー・40年目の素顔～

日本赤軍の最高幹部だった重信房子受刑者の書簡。そこには、女性、母、革命家として歩んだ人生の思いが綴られていた。

387 7月15日

貧困死 ～“助けて”の声が届かない～

貧困層の拡大と孤独死にスポットをあて、「遺品整理士」や貧困問題に取り組む大学教授とともにその原因を探る。

388 8月19日

模擬原爆 ～パンプキンが落ちた町～

大阪・東住吉区に落とされた模擬爆弾「パンプキン爆弾」の傷跡を訪ね、原爆が日本に落とされるまでの軌跡を検証する。

389 9月16日

叶える ～落語家・笑福亭松喬とがん～

末期の肝臓がんが見つかってもお、高座を続ける落語家、笑福亭松喬さんの半年を追い、落語への情熱を描く。

390 10月21日

あいりん地区の子どもたち

西成あいりん地区にある萩之茶屋小学校の子どもたちにスポットを当て、厳しい環境の中でも笑顔で取り組む姿を通して、学校や子どもたちに必要なものは何かを考える。

391 11月18日

保健室からのSOS ～子どもに広がる貧困の実態～

公立小学校の保健室にスポットを当て、子どもに寄り添う養護教諭の姿を通して、親の失業や不安定な就労形態など「子どもの貧困」の実態をあぶり出す。

392 12月23日

千年震災に備える ～地震学者の“温故知新”～

古文書の解読を続けていた地震学者がいる。2012年3月、東大地震研究所を退官した都司嘉宣さんの現地調査に同行して、歴史を知り、地震や津波に備えることの大切さを伝える。

2013年「映像'13」

393 1月20日

あがた森魚だ ～なぜ彼らは追いかけるのか～

シンガーソングライター、あがた森魚氏を追い続けるファンを通し、アーティストとしての魅力を浮き彫りにする。

394 2月17日

リベンジ！ ～元ホストの無料塾～

大阪の無料塾では「高卒認定試験」合格を目指し、リベンジに挑んでいる。塾長は、高校を中退し、ホストをしながら独学で勉強して公立大学に合格した男性だ。

395 3月17日

喪の途中 ～関西に住む遺族の2年～

兵庫県西宮市の藤田さん夫婦は、29歳の娘を東日本大震災で失った。だが、被災地から遠く離れた関西では、悲しみを共有できる人はいない。そして2013年、阪神・淡路大震災の追悼式に参加し、ある思いが宿った。

396 4月21日

被災地の子どもを救う

2012年4月、福島県南相馬市に誕生した「みなみそうまラーニングセンター」。そこでの活動を通して、被災地の発達障がい子どもたちが直面する現状を伝える。

397 5月19日

福島は遠く ～県外避難者の日々～

福島から母親とともに避難してきた男性が、県外避難者を支援する姿を通して、震災から3年目を迎えた県外避難者の生活の実情と故郷への思いを描く。

398 6月9日

京都市の中国人留学生

現在、699人の中国人留学生がいる「京大中国留学生学友会」を取材し、若者たちの日常やその思いに迫る。

399 7月14日

隠された事故 ～焼身自殺の真相を追う～

2007年、37歳の名古屋市バスの運転手が、焼身自殺した。自殺の理由があるはずだと両親が調査を始める。すると職場でのトラブルが、次々と浮かび上がってきた。

400 8月25日

弁護士“夫夫”

2013年、大阪で日本初の同性愛カップルの弁護士事務所が出来た。同性愛カップルの弁護士を通して、社会の中で多様な価値観とどう向き合っていくかを考える。



第68回 文化庁芸術祭賞 優秀賞
第21回 坂田記念ジャーナリズム賞

401 9月15日

終の棲家にて

病院でも家でもない「ホームホスピス」が注目されている。高齢者が一つ屋根の下で暮らす、“終の棲家”を通して、現代の「生」と「死」を見つめる。

402 10月27日

毛先生がゆく ～“知日”と“反日”のはざままで～

冷え込む一方の日中関係。25年前から日本に住み中国で紹介している中国人作家・毛丹青さんを通して、現在の日中関係をどのようにしていけばいいのか考察する。

403 11月17日

尼崎の島唄 ～沖永良部から遠く離れて～

18歳の時に関西に移り住んだ鹿児島県にある沖永良部島の女性の半生にスポットを当て、沖永良部民謡を心の支えに娘とともに島唄を熱唱する日々を追う。

404 12月8日

おらほの町 ～南三陸町長選 奮闘記～

2013年10月、宮城県南三陸町では震災から初めての町長選挙が。復興のあり方とスピードが焦点となった選挙戦を通じて、南三陸町の今を伝える。

2014年「映像'14」

405 1月19日

見えない基地 ～京丹後・米軍レーダー計画を追う～

2013年2月、丹後半島に近畿初の米軍基地設置が決まった。住民には詳しい内容は知らされず、その実態は見えない。米軍基地設置に翻弄される小さな集落を見つめる。



第51回 ギャラクシー賞 奨励賞
第20回 平和・協同ジャーナリスト基金賞 奨励賞

406 2月16日

ここにおいでよ ～居場所を見失った十代のために～

大阪府立西成高校に「となりカフェ」がオープンした。不登校や中退を減らすとともに卒業生の支援を行う試みを追う。

407 3月16日

“自主避難” ～原発事故から3年・家族の苦悩～

原発事故で離れ離れに暮らさざるを得なくなった福島の2家族を8か月間取材。その生活と胸の内を伝え、国や企業の無責任な施策の影で受忍を強いられる理不尽さを描く。



第51回 ギャラクシー賞 奨励賞

408 4月20日

都会っ子山に生きる ～山村留学の春夏秋冬～

都会の子どもたちが山村留学を経験した1年間に密着。初めて親と離れて暮らす生活や地域の人たちとの触れ合いを描く。

409 5月25日

あたりまえのこと ～現代美術家・堀尾貞治～

「具体技術美術協会」は、1972年に解散。メンバーのひとり堀尾貞治の軌跡とその活動を紹介する。

410 6月29日

手紙 ～母さんと呼べなかったあなたへ～

ネグレクトなどで、施設で育った辻心響さんを通して虐待による心理的トラウマに襲われても家族の再生に歩む姿を描く。



第52回 ギャラクシー賞 奨励賞
第22回 坂田記念ジャーナリズム賞

411 7月27日

なぜ私は語り続けるのか ～94歳・ある日本兵の戦場～

元日本兵の近藤一さんは、沖縄戦を生き抜いた。沖縄での慰霊、中国での行為をありのまま語る近藤さんの思いを追う。



第22回 坂田記念ジャーナリズム賞

412 8月31日

被爆を語るということ ～ヒロシマ・69年目の記憶～

被爆体験を「どう伝えるか」ではなく「どう受けとめるべきか」という視点から、若者たちの取り組みを考える。

413 9月21日

知られざる最前線 ～神戸が担ってきた“日米同盟”～

朝鮮戦争時、神戸港が米軍に接收され出撃拠点となるなどした。神戸の知られざる過去を描き、集団的自衛権の意味を問いかける。



第22回 坂田記念ジャーナリズム賞

414 11月16日

われらは八瀬童子 ～悠々の山里に生きる人々～

京都・八瀬の「八瀬童子」は、天皇家とのつながりが深いのが近年、高齢化により住む人は減り、伝統と風習の継承が危ぶまれる。

415 11月30日

彼女が拳に込めるもの ～プロボクサー・多田悦子の挑戦～

女子プロボクサー、多田悦子さんが2014年11月、王座奪回をかけてリターンマッチに挑むまでを追う。

2015年「映像'15」

416 1月11日

未来を守りたい ～舞子高校環境防災科の生徒たち～

日本で唯一、防災専門科がある兵庫県立舞子高校。未来の防災に取り組む高校生たちの姿を見つめる。

417 1月18日

あの日からあしたへ ～震災20年・何が変わり何を変えるのか～

防災研究で知られる神戸大学、室崎益輝名誉教授が指摘する「治・学・連」から阪神・淡路大震災を検証し、何が課題として残っているのか浮き彫りにする。

418 2月22日

寄り添う ～南三陸町 四年目の冬～

阪神・淡路大震災から20年、兵庫県から宮城県南三陸町に来て人々に寄り添い、町をささえる姿を描き、被災地4年目の冬を伝える。

419 3月29日

家族づくり ～子どもたちと里親の一年～

大阪市東淀川区の永井利夫さんとサヨコさん夫婦は、親と暮らせない子どもを育てる里親。40年で80人近い子どもを育てた。泣き、もがき、家族を作ろうとする子どもたちと里親の一年を見つめる。

420 5月3日

長き闘い ～焼身自殺の真相を追う～

2007年、37歳の男性が焼身自殺した。名古屋地裁での判決までを描きながら、新たに明らかになった事実を伝える。

421 5月31日

極限の絵画 ～表現する死刑囚たち～

死刑囚たちが描いた絵画展覧会が開かれた。和歌山カレー事件の林死刑囚などの絵画表現を通して、現在の死刑制度や命の倫理をめぐる問題を考える。

422 6月28日

待ちわびて ～わが子に移植が必要となった時～

心臓移植を待つ吉岡奈緒さん(6)と大林夏奈ちゃん(0)と家族に密着。厳しい現実と直面する家族から、日本の小児の移植医療の現状を伝える。

423 7月26日

よみがえる最前線 ～神戸と核と日米同盟～

戦後、神戸港には米軍基地が作られ、朝鮮戦争やベトナム戦争では核搭載の空母が寄港。米国の核の傘に頼ってきた日本はどこに向かうのか、知られざる神戸の歴史から検証する。

424 8月30日

わが家にやってきた脱走兵 ～ベトナム反戦運動・47年目の真実～

当時19歳の米兵が、ベトナム戦争に日本から送られる際、脱走。当時この映像を撮った小山帥人さんは、もう一度、米兵に会うため米国へ。そして、脱走兵が辿った運命を知る。

425 9月27日

なぜペンをとるのか ～沖縄の新聞記者たち～

「沖縄の2つの新聞社は潰さなあかん」。自民党議員の勉強会で人気作家が発言。背景には、辺野古の米軍基地建設を巡る安倍政権の苛立ちが見え隠れする。『琉球新報』の編集局を1か月余り、取材の様子と紙面づくりの動きを追った。

426 10月18日

いのちを、つかむ ～駆ける救命救急医～

2010年に開設の公立豊岡病院但馬救命救急センター。重症患者の救命率を全国トップクラスに押し上げたセンターの医師たちに1か月密着。救急医療のあり方を考える。



第11回 日本放送文化大賞 準グランプリ
第35回 地方の時代映像祭 優秀賞



第70回 文化庁芸術祭 優秀賞
第40回 JNN ネットワーク協議会賞
第50回 US国際映像祭
ドキュメンタリー部門 佳作



第59回 JCI賞

まっくらな画面に、ゆっくりとしたナレーションが流れる。

<君は 靴というものをはいたことがない>

次に画面は曇のうえにうつ伏せになった男性を映し出し、ナレーションが続く。

<土曜日と日曜日は介護者が来てくれない。そこで君の一日はおおかた、こんな風に過ぎていく……>

これは1988年11月に放送された『映像'80 僕の十月』のはじまりである。ディレクターは里見繁さんだ。<君は>という語り口に、いきなり胸を突かれた。なぜ、こんなナレーション原稿が書けるのか。主人公は森永ヒ素ミルク事件の被害者で歩くことができぬまま成人した男性で、番組は<君>に語りかける形で進行する。

わたしは1985年にMBSに入社、9年間の報道記者を経て『映像』のディレクターになった。番組デビューを前に過去の先輩たちの作品をいくつか見て、萎えてしまった。ニュース原稿は山ほど書いてきてそれなりに自信はあったのだが、ドキュメンタリーは、まったく違うテレビの世界であった。衝撃をうけた作品をもうひとつ。

1993年5月放送の『映像'90 隣の家～千里オールタウン』（山本利樹ディレクター）は、次のような語りで始まる。

<お隣の家のおかしさと主人が言い出したのは、去年の12月初めのことです>

語りの主は10年ほど前に視力を失った65歳の主婦。彼女は目は見えないが、まいにち庭を歩いていて隣の家の変異を感じ取っていく。

<これからお話させていただくのは、私ども夫婦がここに移り住んで30年目に経験した忘れることのできないある事件のことです>

隣の家には70をすぎた老姉妹が住んでいた。いったい何が起きたのか。高齢化したニュータウンが抱える問題点を問う社会派のドキュメンタリーが、盲目の女性のひとり語りで展開することによって俄然ミステリアスになり、見る者のこころをつかみ取ってしまう。ドキュメンタリーというジャンルを超えたすばらしい番組だった。

MBSの『映像』は時代が抱える社会的テーマを扱うという点では古典的ドキュメンタリーだが、その表現法（演出）においては独創的で挑戦的である。それは、今とりあげた才能あふれる先達が切り開き、わたしのような凡人が少しでも近づこうと必死になって手法を学ぼうとした。それが継承されつづける限り、この番組はMBSの宝、といえるのではないだろうか（許されるなら、テレビ界の宝としたいが）。

テレビの世界は、ややもすると他局の後追いに流れてしまうことがある。そこには作り手のパッションも視聴者の感動も薄い。ドキュメンタリーは番組編成上もはや片隅の存在にされてしまったが、『映像』は40年間、新しいとびらを開くことを目指してきた。他局とは常に一線を画した番組を作り続けてほしいと願っている。



● 澤田 隆三（元ディレクター・プロデューサー）

SAWADA ryuzo

大阪市出身、1985年MBS入社。報道記者を経て『映像'90』ディレクターとして6年間で19本を演出。

99年放送『映像'90ふつうのまままで～ある障害者夫婦の日常』が第27回国際エミー賞・最優秀賞を受賞。

2015年から『映像』プロデューサーとして25本を制作。

『映像'17 教育と愛国』で第55回ギャラクシー大賞受賞。

現在、報道局報道主幹。

427 11月29日

はたらくしあわせ ～障がい者と高齢者・協働の現場から～

「アドバンス西宮」は、障がい者と高齢者が協働し業績を上げる。自閉症の龍竹秀二さん、知的障がいのある三浦泰輝さん、ダウン症の茂木亮磨さんの仕事への取り組みを見つめる。

428 12月20日

白い炎 ～放火殺人20年の真実～

1995年、大阪市東住吉区の民家で12歳の女兒が焼死した。母親と男性を放火殺人容疑で逮捕し、無期懲役に。2人は無実を訴え、再審を勝ち取る。母親、青木恵子さんが、自白を強要された取調べと弁護団の活動をたどり、司法の構造的な問題を指摘する。



第53回 ギャラクシー賞 奨励賞
第23回 坂田記念ジャーナリズム賞

2016年「映像'16」

429 1月31日

テレビの中の橋下政治 ～“ことば”舞い散る8年～

橋下徹氏が、大阪府政・市政に関わる間に発した“ことば”を時系列で整理し、関係性や整合性を分析。“橋下政治”とは何だったのかを探る。

430 3月6日

よみがえる科学者 ～水戸巖と3・11～

30年以上前から原発の危険性を訴えていた科学者、水戸巖氏。死後に妻、喜世子さんは、福島原発事故を機に夫が残した警告を伝えるため立ち上がる。水戸氏は何を思い、どう生きようとしていたのか、足跡を追った。

431 3月27日

“自主避難” ～原発事故から5年・真実と風化～

原発事故から、5年。大阪や新潟に「自主避難」する2つの家族。「自主避難」の当事者たちの不安や苦悩を描く。

432 5月8日

生き抜く そのあと ～南三陸町 五年目の言葉～

東日本大震災直後から続く宮城県南三陸町の定点取材。「町の復興」と「被災者の心」、通い続ける取材の中で見えてきた5年目の人々を描く。

433 5月29日

追いつめられた“真実” ～息子の焼身自殺と両親の9年～

2007年、名古屋市バスの男性運転手が、焼身自殺した労災問題。2016年、名古屋高裁の判決で、逆転勝訴の判決が出た。闘い続けた両親の9年を追う。



第54回 ギャラクシー賞 選奨

434 6月26日

花の咲くとき ～こどもホスピスの3か月～

2012年、日本初となる淀川キリスト教病院「こどもホスピス」が開設。幼い末期がん患者、前中咲乃ちゃんと両親、家族を支えながら子どもたちの生命の輝きに満ちた日々をサポートする「こどもホスピス」の活動に密着。



第54回 ギャラクシー賞 奨励賞

435 7月31日

自衛官とその家族 ～戦後71年目の夏に～

「違憲」との批判も多い「安全保障関連法」が成立。自衛隊が交戦する可能性が現実味を帯びてきた。兵士の顔ではなく、施設部隊員として、一発の銃も撃たず国際貢献を続けてきた自衛官。その歴史の転換点を迎える今、「軍人としての義務」に直面し、揺れる自衛官の生の声に耳を傾けた。

436 8月28日

誰が遺骨を帰すのか ～玉砕の島サイパン・72年目の夏～

サイパン戦の生き残り兵士や遺骨収集を行う民間団体を取材し、「今も帰らぬ遺骨」の謎を明らかにする。

437 9月25日

21年目の暑い夏 ～“娘殺し”とされた母と家族～

「東住吉放火殺人事件」で無罪が確定した青木恵子さんを追ひ、えん罪が家族の人生にどのような影響を与えたのか、司法の犯した罪の大きさを問う。

438 10月30日

がんとお金 ～“夢の薬”の光と影～

免疫チェックポイント阻害剤や医療費の仕組みを解説。治療を受ける患者や最先端のがん治療に当たる臨床現場の医師たちを取材。医療費を脅かしかねない、新しいがん治療薬の光と影を浮き彫りにする。

439 11月27日

なぜ私は変わったのか ～元総理・小泉純一郎と3.11～

小泉元総理に「原発ゼロ」運動を聞いた。国是・国策として原発を推進していた小泉氏が、なぜ立場を180度変えたのか。話題は、人生論にまで及ぶ…。

2017年「映像'17」

440 1月29日

沖縄 さまよう木霊 ～基地反対運動の素顔～

2016年10月、沖縄の東村高江で建設中のヘリパッドに反対する住民に対し、中傷する記事やデマが数多く流れた。現地で実際に何が起きているのかを伝える。

441 2月26日

自主避難者はどこへ ～迫られる「帰還」か「定住」か～

2017年3月末で、国が設定した避難指示区域外から避難している「自主避難者」への住宅無償提供が終了する。被災地から各地に自主避難した人を訪ね早期の避難終了へのさまざまな思いと制度の問題点について考える。

442 3月19日

三陸夢幻鉄道 ～悲願から悲運の40年～

JR気仙沼線は大部分の廃止が決定、宮城県南三陸町は、住民が鉄道復活を求める運動を始めた。気仙沼線の歴史を振り返り、住民が望む「真の復興」とはどうあるべきかを考える。



第24回 坂田記念ジャーナリズム賞



第72回 文化庁芸術祭 優秀賞
第54回 ギャラクシー賞 奨励賞
2017年 民放連盟賞 優秀賞
第27回 地方の時代映像祭 優秀賞

443 3月26日

支えて、支えられ ～生活保護の現場と「みさ姉」～

兵庫県尼崎市で生活保護受給者の就労支援をする女性や受給者たちを通して、生活保護とは、本来どうあるべきか考える。

444 4月30日

生き心地の良い町を訪ねて ～徳島・海部の人々～

和歌山県立医科大学の岡檀さんの著書で、自殺率が低い町として取り上げられた徳島県の旧海部町を訪ねる。本の中で自殺予防因子として挙げられた要因を町の中に探つてゆく。

445 5月28日

全村避難6年 ～福島・飯舘村と科学者の記録～

福島県飯舘村は、原発事故で汚染された。村は、いったい何を失ったのか。村民と科学者、それぞれの目線から考える。

446 6月25日

母は死刑囚 ～息子が語るもう一つのカレー事件～

「和歌山カレー事件」から20年。事件を見つめ直し、当時、小学4年生の長男への独占取材を交えて多角的に検証する。

447 7月30日

教育と愛国 ～教科書でいま何が起きているのか～

過去の歴史教科書検定問題などにも目を向け、知られざる「教科書の攻防」を伝えるとともに、教育のあり方を考える。

448 8月27日

宮武外骨と安倍政治 ～権力の喰い方～

宮武外骨氏は、明治・大正・昭和を通じて活躍した反骨のジャーナリスト。2017年、生誕150年を機に現代に外骨が生きていたら、何をどのように批判・追求するだろうか。

449 9月24日

がんとネット ～患者を惑わす情報の渦～

がん患者は「最善」の情報を求め歩く。がんの正しい情報発信を模索する医師らの動きを追い、患者たちの声を聞く。

450 10月27日

大阪・新世界物語 ～この町と生きる人たち～

大阪・新世界で生きる様々な人たちにカメラを向け語られる生き様に耳を傾ける。

451 11月26日

私は殺していない ～呼吸器外し事件の真相～

元看護助手の西山美香さんは、男性の人工呼吸器を外し死亡させたとして逮捕され服役した。出所後、一貫して無実を訴え、再審請求をしている。再審までの道のりを追う。



第55回 ギャラクシー賞 大賞
第38回 地方の時代映像祭 優秀賞



第55回 ギャラクシー賞 奨励賞



第55回 ギャラクシー賞 奨励賞



第25回 坂田記念ジャーナリズム賞



第55回 ギャラクシー賞 奨励賞

2018年「映像'18」

452 1月28日

再審決定 ～元看護助手・無実の訴え～

2017年、大阪高裁は西山美香さんの再審開始を決定。理由は“自白は信用できない”だった。再審決定に至る過程を追う。

453 2月25日

ローズアパート ～ひとつの老いのかたち～

京都・清水寺近くにある小さな文化住宅。高齢者7世帯が暮らす。高齢者の助け合いの生活で見えてきたのは？

454 3月18日

希望の果てに ～分かれ道をゆく政治家たち～

安倍政権一強を前に迷走する野党政治家たち。そんな彼らの姿を追い、野党勢力の存在危機とその行方とは。

455 3月25日

がんとゲノム ～最新医療の希望と課題～

がんの医療現場は、急速に大きく変わろうとしている。そんな中、がんゲノム医療は幕を開けようとしている。

456 4月29日

帰ってきた脱走兵

～ベトナム反戦運動・50年目の真実～

ベトナム戦争当時、脱走した元米兵が、50年振りに来日。「戦争」が過去のものではない現実と向き合う。

457 5月27日

職場で死なせない ～過労死家族の終わらぬ闘い～

夫は、トヨタで働き過労死した。亡くなって15年以上過ぎたが、今も過労死と向き合う妻の姿を通し、働き方改革を考える。

458 6月24日

スイーツ一代 ～65歳、人生の選択～

京都の人気洋菓子店「グルニエ・ドール」だが、オーナーの西原金蔵さんは、65歳で閉店を決める。その生き方とは？

459 7月29日

フジヤン、94歳 ～ある助産師が伝える言葉～

坂本フジエさん94歳。和歌山県田辺市で暮らす日本最高齢の助産師「フジヤン」の日常を描く。

460 8月26日

記憶する歌 ～科学者が詠う三十一文字の世界～

京都産業大学の細胞生物学者、永田和宏教授は、社会の「危機」を詠む。その情景を京都の町や歌人がいた場所とともに映像化。

461 9月30日

薬草のタイムカプセル ～奈良・森野旧薬園の四季～

奈良の森野家の旧薬園を紹介。日本の生薬文化の継承が困難な中、薬草にまつわる伝統を守る「家」と「人」を見つめる。

462 10月28日

生きなおし ～元ヤクザが取り組む施設の日々～

元暴力団員の男性が取り組む更生施設に密着。刑務所か少年院を出た人への再犯防止の道筋と再生を追う。

463 11月25日

あるボクサーの死 ～精神医療を問う父の闘い～

28歳のプロボクサーが、命を絶った。彼は、統合失調症の治療をしていた。父は、治療方法に疑問を感じ裁判に訴える。

464 12月16日

バッシング ～その発信源の背後に何が～

ネットでは、学問とメディアを攻撃する言説で溢れかえる。名指しされる対象は、安倍政権を批判する研究者やメディアの人々。何が背後にあるのかを探っていく。



第39回 地方の時代映像祭 優秀賞
第56回 ギャラクシー賞 奨励賞
2019年 民放連盟賞 審査委員特別賞

2019年「映像'19」

465 1月27日

未来医学者 ～世界初“iPS心筋”の10年～

澤阪大教授と山中京大教授が、手を組んで10年余り。iPS細胞で作る心筋シートの臨床試験が始まる。これからの再生医療のあるべき姿を伝える。



第61回 科学技術映像祭 優秀賞

466 2月24日

フクシマの母 ～母子避難8年・闘いの記録～

森松さんは、原発事故で福島から大阪に避難した。変化や成長を遂げた避難者家族の様子を伝える。

467 3月31日

使い捨て異邦人 ～苦悩する外国人労働者たち～

2018年、出入国管理法改正法が成立し、外国人労働者受け入れ拡大が決まった。日本で働く外国人労働者は、どのように働き、どんな問題を抱えているのか。



第27回 坂田記念ジャーナリズム賞特別賞

468 4月28日

響希の未来 ～全盲の少年と家族の12年～

酒井響希くん(12)の夢は、プロドラマー。1歳の時、小児がんと診断され、両目を摘出せざるを得なかった。響希くんと家族を通して「生きる」と「家族の絆」を考える。

469 5月26日

壊憲 ～この国の憲法は、どこへ～

憲法改正に異を唱える学者がいる。小林節氏は、かつて改憲派として名をはせた。憲法が「壊される」危機を抱く人々にマイクを向ける。

470 6月30日

閉じた病棟 ～大学病院で何が起きたのか～

治療を望む患者がいるのに滋賀医科大学の前立腺がん治療が受けられない。大学病院をめぐる閉ざされた構図に焦点あてる。

471 7月28日

ある徴用工の手記から ～日韓の間に何が起きているのか～

日韓関係は徴用工問題をめぐって最悪の状態。隣国同士のもつれにもつれた関係を解きほぐす。

472 8月25日

私が立候補する理由 ～元外国人の選挙戦～

2005年に帰化したにしゃんたさんが、参院選に立候補を決めた。その選挙戦に密着し、この国の政治の姿をみつめる。

473 9月22日

ガチウヨ ～主権は誰の手にあるのか～

ガチウヨと称する右翼活動家。ガチウヨとネトウヨ、この国が、直面する「愛国」とは、「主権」とは何かを描く。

474 10月27日

えん罪漂流記 ～元看護助手が失った16年～

えん罪被害に苦しめられる西山さんの闘いに密着。再審が始まるのを前にその心の奥底からの叫びに耳を傾ける。

475 11月24日

ぶつかりあう日韓 ～徴用工裁判の核心～

徴用工裁判の原告勝訴を機に悪化の一途をたどる日韓関係。戦後処理のあり方を検証し、日韓の関係修復を考える。



2020年「映像'20」

476 1月26日

あなたを忘れていない ～被災者と歩んだ25年～

「震災弱者」の支援から退く牧秀一さん。牧さんが、いま思う震災や災害支援の在り方とは…。



477 2月2日

母を探して ～行方不明者家族の25年～

阪神・淡路大震災では、いまだ3人の行方不明者がいる。佐藤悦子さんの母は当時、65歳。行方が今もわからない。知られざる行方不明者に光を当て震災を考える。

2020年 民放連盟賞 審査委員特別賞

478 3月1日

わたしと弟 ～在日女性が生きるいま～

在日3世の辛淑玉さんは2年前、壮絶なバッシングに晒され国外へ避難した。その辛さんが一時帰国する。在日を生きた辛さんの目を通し、このニッポンを見つめなおしてみたい。



第57回 ギャラクシー賞 奨励賞

479 3月29日

「復興五輪」の陰で東北は…

2021年に延期された東京オリンピック・パラリンピックは、復興五輪とも呼ばれている。しかし、東北の復興は、大手資本や国の大型プロジェクト主導で地元は、恩恵が受けられていない。



第57回 ギャラクシー賞 選奨

480 4月26日

見えない敵 ～“新型コロナウイルス”との闘い～

新型コロナの感染拡大が続く。感染対策や医療体制は、十分か。様々な検証を加え、新型コロナに翻弄される社会を追う。

481 4月26日

私は殺していない ～再審無罪への17年～

再審公判で有罪立証を断念した検察…。再審公判開始から「完全な無罪」を勝ち取るまでの西山美香さんの日々に着目する。

482 5月31日

13坪の物語 ～小さな本屋が愛される理由～

大阪市にある小さな本屋さんに密着。書籍を通じた人生模様が、浮かび上がるが店は、コロナの拡大で対応に追われる。

483 6月28日

コロナ禍と闘う行政 ～大阪府健康医療部の180日～

コロナ禍に立ち向かう大阪府の担当者たちの姿を記録。太田知事以降、続く予算削減の中で切り詰められてきた医療行政の現状も検証する。

484 7月26日

コロナと薬 ～ワクチン開発の期待と不安～

大阪で日本初の新型コロナワクチンの臨床試験が始まる。一方で、性急なワクチン開発に警鐘を鳴らす医者も少なくない。ワクチン開発の最前線を追う。

485 8月30日

史実と神話 ～戦後75年目の教科書と歴史～

「育鵬社」の教科書は、歴史と公民分野で採択数が躍進するのではないか、と危惧する声も、聞こえてくる。戦後75年を迎える今、「歴史改ざん」の歴史に正面から向き合う。

486 9月27日

支え合い ～中国残留邦人と介護施設～

2020年1月に出来た尼崎の介護施設は、田山幸雄さんと元中国人の妻、栄華さんで運営している。中国残留邦人が、介護施設に馴染めないと知り開いたが、コロナ禍に翻弄される。



近年の番組は「MBS動画イズム」でご視聴いただけます。
番組ホームページでご案内しています。

「映像'20」番組公式 HP <https://www.mbs.jp/eizou/>

「映像'20」番組公式 facebook <https://www.facebook.com/MBS.eizou/>

MBS 動画イズム https://dizm.mbs.jp/title/?program=eizou_series

番組公式HPのQRコード

番組は国内外のコンクールで高い評価を受け、芸術祭賞を始め、日本民間放送連盟賞、日本ジャーナリスト会議賞、更にはテレビ界のアカデミー賞といわれる国際エミー賞の最優秀賞を受賞するなど、輝かしい成果を上げてきました。また、こうした長年にわたる地道な活動と実績に対して、2003年には放送批評懇談会から「ギャラクシー特別賞」を受賞しています。

受賞一覧

- 1981年 民間放送連盟賞 報道番組部門 優秀賞
「だましぶね～癌と闘う母と子の記録～」(1980年11月7日放送)
- 第38回 文化庁芸術祭賞 優秀賞
第10回 放送文化基金賞 奨励賞
「神戸新開地 幸福荘界限」(1983年11月12日放送)
- 1984年 民間放送連盟賞 教養番組部門 優秀賞
「生命のエピローグ～脳死の時代と心臓移植～」(1984年6月30日放送)
- 1987年度 日本ジャーナリスト会議賞 奨励賞 (JCJ賞)
第3回 世界テレビ映像祭 外国人審査員賞
「我が名は朴実」(1986年10月19日放送)
- 第4回 文化庁芸術作品賞 (テレビドキュメンタリー部門)
「ともだち～宗谷岬発武庫川行～」(1988年12月18日放送)
- 第15回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
第30回 日本テレビ技術賞 奨励賞
「おにいちゃんの春」(1990年5月20日放送)
- 1992年 民間放送連盟賞 教養番組部門 優秀賞
第32回 日本テレビ技術賞
「伝える言葉～大阪府立柴島高校～」(1992年3月15日放送)
- 第33回 日本テレビ技術賞 奨励賞
「隣の家～千里オールドタウン～」(1993年5月16日放送)
- 1995年 民間放送連盟賞 教養番組部門 最優秀賞
第34回 日本テレビ技術賞
第19回 JNNネットワーク協議会賞
「癌を生きる～医師布施徳馬の日記から～」(1994年11月20日放送)(リメイク1995年5月29日放送)
- 第3回 坂田記念ジャーナリズム賞
「大阪大空襲～50年目の証言～」(1995年3月19日放送)
- 第20回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
「活断層～近畿の地震危険地帯を追う～」(1995年11月19日放送)
- 1997年 民間放送連盟賞 教養番組部門 優秀賞
第21回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
「よみがえる調べ～天才バイオリニスト渡辺茂夫～」(1996年8月18日放送)
- 第1回 女性と放送ネットワーク賞
「さまよえる均等法1期生たち～関学・西山ゼミの場合～」(1996年11月17日放送)
- 1998年度 日本ジャーナリスト会議賞 奨励賞
第6回 坂田記念ジャーナリズム賞
「薬害ヤコブ病～谷たか子の闘病記録～」(1998年3月15日放送)

- 第38回 日本テレビ技術賞
「シネマ・セラピスト～素人介護の2か月～」(1998年9月20日放送)
- 2000年 民間放送連盟賞 報道番組部門 優秀賞
「残された人々～在日韓国人軍属の戦後補償～」(1999年9月19日放送)
- 2000年 民間放送連盟賞 教養番組部門 優秀賞
「カミングアウト～先生のレズビアン宣言～」(1999年11月21日放送)
- 第8回 坂田記念ジャーナリズム賞
「かく闘えり～在日韓国人軍属の戦後補償～」(2000年9月10日放送)
- 第57回 民間放送連盟賞 報道番組部門 優秀賞
「終着駅のむこう～国労闘争団の家族たち～」(2001年5月30日放送)
- 第57回 文化庁芸術祭 優秀賞 (テレビドキュメンタリー部門)
2002年 民間放送連盟賞 報道番組部門 最優秀賞
第44回 日本ジャーナリスト会議賞
「出所した男」(2001年10月21日放送)
- 2002年 民間放送連盟賞 教養番組部門 優秀賞
「つれあい～丹後・味土野物語～」(2001年5月20日放送)
- 第27回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
「家族のかたち～ある里親家庭の9か月～」(2002年6月16日放送)
- 第29回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
「つぐなう～リンチ殺人・加害少年と遺族の対話～」(2004年2月15日放送)
- 第13回 坂田記念ジャーナリズム賞
「祖国よ～中国残留孤児の戦後～」(2005年10月16日放送)
- 第31回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
「今を刻んで～若年認知症とともに～」(2006年6月18日放送)
- 2007年(第3回) 日本放送文化大賞 テレビ部門 グランプリ
「私は生きる～JR福知山線事故から2年～」(2007年3月18日放送)
- 第32回 JNNネットワーク協議会賞 奨励賞
第34回 放送文化基金賞 番組部門 テレビドキュメンタリー番組賞
2008年 民間放送連盟賞 報道番組部門 優秀賞
「夫はなぜ、死んだのか～過労死認定の厚い壁～」(2007年12月9日放送)
- 2008年 民間放送連盟賞 教養番組部門 最優秀賞
第35回 放送文化基金賞 番組部門 テレビドキュメンタリー番組賞
「家族の再生～ある児童養護施設の試み～」(2008年4月20日放送)
- 第16回 坂田記念ジャーナリズム賞特別賞
「息子は、工場で死んだ～急増する非正規労働者の労災事故～」(2008年12月14日放送)
- 2009年 民間放送連盟賞 報道番組部門 優秀賞
「DNA鑑定のかんづき」(2009年5月17日放送)
- 2010年 民間放送連盟賞 教養番組部門 最優秀賞
「きほとみずき～大人の階段 車いすで駆けのぼる～」(2010年5月16日放送)
- 2010年 坂田記念ジャーナリズム賞
2010年 JNNネットワーク協議会賞 大賞
「母との暮らし～介護する男たちの日々～」(2010年4月25日放送)

- 第68回 文化庁芸術祭 優秀賞
第21回 坂田記念ジャーナリズム賞
「隠された事故～焼身自殺の真相を追う～」(2013年7月14日放送)
- 第20回 平和・協同ジャーナリスト基金賞 奨励賞
「見えない基地～京丹後・米軍レーダー計画を追う～」(2014年1月19日放送)
- 第22回 坂田記念ジャーナリズム賞
「なぜ私は語り続けるのか～94歳・ある日本兵の戦場～」(2014年7月27日放送)
「被爆を語るということ～ヒロシマ・69年目の記憶～」(2014年8月31日放送)
「知られざる最前線～神戸が担ってきた"日米同盟"～」(2014年9月21日放送)
- 第11回 日本放送文化大賞 準グランプリ
「家族づくり～子どもたちと里親の一年～」(2015年3月29日放送)
- 第70回 文化庁芸術祭 優秀賞
第40回 JNNネットワーク協議会賞
「わが家にやってきた脱走兵～ベトナム反戦運動・47年目の真実～」(2015年8月30日放送)
- 第23回 坂田記念ジャーナリズム賞
「白い炎～放火殺人20年の真実～」(2015年12月20日放送)
- 第59回 JCJ賞
「なぜペンをとるのか～沖縄の新聞記者たち～」(2015年9月27日放送)
- 第24回 坂田記念ジャーナリズム賞
「がんとお金～"夢の葉"の光と影～」(2016年10月30日放送)
- 2017年 民間放送連盟賞 テレビ報道部門優秀賞
第72回 文化庁芸術祭 優秀賞
「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔～」(2017年1月29日放送)
- 第25回 坂田記念ジャーナリズム賞特別賞
「私は殺していない～呼吸器外し事件の真相～」(2017年11月26日放送)
- 2019年 民間放送連盟賞 審査委員特別賞
「バッシング～その発信源の背後に何が～」(2018年12月16日放送)
- 第61回 科学技術映像祭 研究・技術開発部門 優秀賞
「未来医学者～世界初"iPS心筋"の10年～」(2019年1月27日放送)
- 第27回 坂田記念ジャーナリズム賞 特別賞
「使い捨て異邦人～苦悩する外国人労働者たち～」(2019年3月31日放送)
- 2020年 日本民間放送連盟賞 審査委員特別賞
「母を探して～行方不明者家族の25年～」(2020年2月2日放送)

地方の時代映像祭

- 第1回 優秀賞「新アリランのうた～'80・冬・猪飼野～」(1981年2月6日放送)
- 第2回 優秀賞「昭和の女たち～忠魂碑訴訟原告団～」(1982年6月12日放送)
- 第3回 優秀賞「汚職に怒りを～堺市倫理条例をめぐって～」(1983年2月12日放送)
- 第4回 優秀賞「倫理条例の全体像～堺市の一年～」(1984年2月11日放送)
- 第5回 優秀賞「一本の指から～韓国人高校生の指紋押捺～」(1985年2月16日放送)
- 第6回 優秀賞「平和の40年～関千枝子さんのヒロシマ～」(1985年8月17日放送)

- 第7回 特別賞「我が名は朴実」(1986年10月19日放送)
- 第8回 優秀賞「破壊の後～肝苦りさや・沖縄～」(1988年1月17日放送)
- 第9回 審査委員会推賞「不明の花～塔 和子の世界～」(1989年6月18日放送)
- 第12回 大賞「伝える言葉～大阪府立柴島高校～」(1992年3月15日放送)
- 第14回 優秀賞「十津川村の戦争」(1994年3月13日放送)
- 第15回 優秀賞「村の反乱～もうダムはいらん～」(1995年5月21日放送)
- 第19回 審査委員会推賞「ふつうのままで～ある障害者夫婦の日常～」
(1999年4月18日放送)
- 第20回 優秀賞「残された人々～在日韓国人軍属の戦後補償～」(1999年9月19日放送)
- 第23回 優秀賞「消えたアリバイ～滋賀・日野町殺人事件～」(2003年3月16日放送)
- 第28回 グランプリ「夫はなぜ、死んだのか～過労死認定の厚い壁～」
(2007年12月9日放送)
- 第29回 優秀賞「彼女は嘘をついたのか」(2008年9月14日放送)
- 第35回 優秀賞「家族づくり～子どもたちと里親の一年～」(2017年3月29日放送)
- 第37回 優秀賞「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔～」(2017年1月29日放送)
- 第38回 優秀賞
「教育と愛国～教科書でいま何が起きているのか～」(2017年7月30日放送)
- 第39回 優秀賞「バッシング～その発信源の背後に何が～」(2018年12月16日放送)

ギャラクシー賞

- 第25回 特別賞・平和の賞「映像'80」
- 第29回 奨励賞「伝える言葉」(1992年3月15日放送)
- 第31回 選奨「十津川村の戦争」(1994年3月13日放送)
- 第32回 優秀賞「夢追い人～人生、出直しの夏～」(1994年8月21日放送)
奨励賞「癌を生きる～医師布施徳馬の日記から～」(1994年11月20日放送)
- 第33回 奨励賞「村の反乱～もうダムはいらん～」(1995年5月21日放送)
奨励賞「十津川村」(1996年2月18日放送)
- 第34回 選奨「孤り高く～反骨の写真家・福島菊次郎～」(1997年1月19日放送)
- 第35回 選奨「14歳 闇にむかうところ～報告・神戸児童殺害事件～」
(1997年8月24日放送)
奨励賞「山里日記～ある80歳夫婦の秋～」(1997年12月21日放送)
奨励賞「自然農・春夏秋冬」(1998年2月15日放送)
- 第36回 選奨「薬害ヤコブ病～谷たか子の闘病記録～」(1998年3月15日放送)
- 第37回 奨励賞「カミングアウト～先生のレズビアン宣言～」(1999年11月21日放送)
- 第38回 選奨「ほったらかしで子は育つ～「肢体不自由児」の子育て記～」
(2001年2月18日放送)
奨励賞「とどかぬ怒り～検証・能勢ダイオキシン汚染～」
(2000年7月16日放送)
奨励賞「さいはての大地で～国労闘争団の14年～」(2000年10月22日放送)

- 第39回 選奨「つれあい～丹後・味土野物語～」(2001年5月20日放送)
奨励賞「ナニワの見張り番～12年目の行政監視～」(2001年9月9日放送)
- 第40回 特別賞「映像'02-'03」
選奨「消えたアリバイ」(2003年3月16日放送)
奨励賞「舞に狂うて～万作と佳卓～」(2003年1月19日放送)
- 第41回 選奨「おとんはおかん～性同一性障害と家族～」(2003年12月14日放送)
- 第42回 奨励賞「夢の新薬の幻想～抗がん剤イレッサ副作用被害～」
(2005年2月20日放送)
- 第43回 奨励賞「祖国よ～中国残留孤児の戦後～」(2005年10月16日放送)
- 第44回 奨励賞「私は生きる～JR福知山線事故から2年～」(2007年3月18日放送)
- 第45回 優秀賞「夫はなぜ、死んだのか～過労死認定の厚い壁～」
(2007年12月9日放送)
奨励賞「父のまなざし～難病の父から子ども達へのメッセージ～」
(2007年4月15日放送)
- 第46回 優秀賞「彼女は嘘をついたのか」(2008年9月14日放送)
選奨「なぜ警告を続けるのか～京大原子炉実験所・“異端”の研究者たち～」
(2008年10月19日放送)
奨励賞「息子は、工場で死んだ～急増する非正規労働者の労災事故～」
(2008年12月14日放送)
- 第47回 選奨「DNA鑑定のかんづね」(2009年5月17日放送)
- 第48回 選奨「母との暮らし～介護する男たちの日々～」(2010年4月25日放送)
- 第49回 奨励賞「温泉診療所～医者と少年と母親と～」(2011年11月20日放送)
- 第49回 奨励賞「受忍～放置され続ける空襲被災者～」(2012年2月19日放送)
- 第51回 奨励賞
「見えない基地～京丹後・米軍レーダー計画を追う～」(2014年1月19日放送)
「“自主避難”～原発事故から3年・家族の苦悩～」(2014年3月16日放送)
- 第52回 奨励賞
「なぜ私は語り続けるのか～94歳・ある日本兵の戦場～」
(2014年7月27日放送)
- 第53回 奨励賞
「白い炎～放火殺人20年の真実～」(2015年12月20日放送)
- 第54回 選奨
「追いつめられた“真実”～息子の焼身自殺と両親の9年～」
(2016年5月29日放送)
奨励賞
「自衛官とその家族～戦後71年目の夏に～」(2016年7月31日放送)
奨励賞
「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔～」(2017年1月29日放送)

- 第55回 大賞
「教育と愛国～教科書でいま何が起きているのか～」(2017年7月30日放送)
奨励賞
「宮武外骨と安倍政治～権力の嗟い方～」(2017年8月27日放送)
「がんとネット～患者を惑わす情報の渦～」(2017年9月24日放送)
奨励賞
「再審決定～元看護助手・無実の訴え～」(2018年1月28日放送)
- 第56回 奨励賞
「バッシング～その発信源の背後に何が～」(2018年12月16日放送)
- 第57回 選奨
「『復興五輪』の陰で東北は…」(2020年3月29日放送)
奨励賞
「わたしと弟～在日女性が生きるいま～」(2020年3月1日放送)

国際賞

- 1999年 国際エミー賞 最優秀賞(ドキュメンタリー部門)
1999年 日本賞・審査員特別推奨
「ふつうのままで～ある障害者夫婦の日常～」(1999年4月18日放送)
英語吹替版タイトル「Just Like Anyone Else」
- 2001年 国際エミー賞 入選
2001年 アジアテレビ賞 入選
「生まれ来るわが子へ～薬害エイズ被害者夫婦の選択～」(2000年8月20日放送)
英語吹替版タイトル「For My Baby」
- 2001年 ユニセフ子どもの権利賞 グランプリ
「ほったらかしで子は育つ～「肢体不自由児」の子育て記～」(2001年2月18日放送)
英語吹替版タイトル「Children Will Grow」
- 2002年 上海テレビ祭 入選
「つれあい～丹後・味土野物語～」(2001年5月20日放送)
英語吹替版タイトル「My Better Half」
- 2003年 アジアテレビ賞 第2位
「炎のダンス～ツッパリ先生と60人の子どもたち～」(2002年7月14日放送)
英語吹替版タイトル「Dance Of Fire」
- 2004年 第29回ゴールデンチェスト国際テレビ祭 入選
「誇大妄想の都へ～ヤノベケンジEXPO'03～」(2003年8月17日放送)
英語吹替版タイトル「Post-apocalyptic Playground
～The World of Contemporary Sculptor・Kenji Yanobe」
- 2005年 第11回上海テレビ祭 入選(人間ドキュメンタリー部門)
2005年 第45回モンテカルロテレビ祭 入選(環境問題番組部門)
2005年 第30回ゴールデンチェスト国際テレビ祭 入選(ドキュメンタリー部門)
「あい・織の四季～化学物質過敏症とともに～」(2004年12月12日放送)
英語吹替版タイトル
「Coping with Chemical Hypersensitivity-One Woman's Story」
- 2006年 第31回ゴールデンチェスト国際テレビ祭 入選(ドキュメンタリー部門)
「牧場と子どもたち」(2005年4月17日放送)
英語吹替版タイトル「A Pasture for Youths」

- 2007年 第40回US国際映像祭 第3位 (ドキュメンタリー部門社会問題番組カテゴリー)
 2007年 アジアテレビ賞 審査員推奨 (長編ドキュメンタリー部門)
 2007年 第9回 四川テレビ祭国際金熊猫ドキュメンタリー賞 入選 (社会部門)
 2008年 ニューヨーク・フェスティバル 銅賞 (社会時事部門)
 「被爆61年～終わらない認定裁判～」(2006年11月19日放送)
 英語吹替版タイトル「HIROSHIMA-Voice Without a Voice」
- ワールドメディアフェスティバル2010
 ドキュメンタリー部門グランド・アワード
 「逃げる司法」(2009年9月20日放送)
- 2012年 ニューヨークフェスティバル
 ドキュメンタリー歴史・社会番組部門
 「利休にはなれんかった～裏千家前家元の戦後65年～」(2010年9月19日放送)
- 第50回 US国際映像祭ドキュメンタリー部門 (社会問題)
 クリエイティブ・エクセレンス賞 (佳作)
 「わが家にやってきた脱走兵～ベトナム反戦運動・47年目の真実～」
 (2015年8月30日放送)

編集後記

この度は、みなさまの多大なるご協力により「映像シリーズ40年」の記念冊子を作成することが出来ました。心から感謝申し上げます。

ドキュメンタリー番組の制作は、取材対象者はもちろんですが、関係する多くのスタッフのみなさんとの「縁」があってようやく完成し、放送に漕ぎつけます。「縁」とは不思議なもので、言うまでもなく40年前の私は、テレビでドキュメンタリー番組の制作に携わることなど夢にも思っていませんでしたし、「映像シリーズ」40年の節目にプロデューサーをしているなど考えもしていませんでした。

多くの人たちとの「縁」あって、番組は40年もの長きにわたって放送し続けることができ、これからも「映像シリーズ」が、続いていくことを願ってやみません。

テレビ業界はいま、大きな岐路に立ち、様々な変革が求められています。そんな中であっても、愛してやまない報道ドキュメンタリー番組「映像シリーズ」は、これからバトンを受け継ぐプロデューサーやディレクターたちの熱い思いとともにしっかりと大地に根付き、揺るぎない信念で制作されることを信じています。「縁」で結ばれたみなさまからの厳しい意見や温かい激励こそが、番組制作者の糧となります。引き続きよろしくお願い申し上げます。(番組プロデューサー 奥田 雅治)

● 奥田 雅治

OKUDA masaharu

1962年生、「映像'13 隠された事故」で文化庁芸術祭賞、「映像'07 夫はなぜ、死んだのか」でギャラクシー賞、放送文化基金賞、地方の時代映像祭グランプリ、日本民間放送連盟賞など受賞、「映像'08 息子は、工場で死んだ」でギャラクシー賞、坂田記念ジャーナリズム賞、「映像'10母との暮らし」でギャラクシー賞、JNNネットワーク協議会賞大賞、坂田記念ジャーナリズム賞、「映像'16 追い詰められた“真実”」でギャラクシー賞を受賞。著書に「焼身自殺の闇と真相」(桜井書店)などがある。



40

映像シリーズ40年